

十二  
夜物語

5

その一

サイクリングロード  
自転車道路

11

その二

同期

21

その三

たんす  
筆筒の抽斗

31

その四

水路(一)

49

その五

アルフレッドの  
星の群れ

61

その六

すいめい  
水命

67

その七

水路(二)

77

その八

濁流

87

その九

ざんごう  
塹壕を出でて  
サバイバル  
白兵戦に備えよ

93

その十

うちで  
打出の小槌

111

その十一

鉄橋

117

その十二

我が輩は  
小猫である

その  
一

自<sup>サイ</sup>転<sup>ク</sup>車<sup>リン</sup>道<sup>グ</sup>路<sup>ロード</sup>

「ねえ、ね、こんなのはどう？観光バスで移動中にね、携帯電話が二ヶ所で鳴り始めるの。気になっていた男の人とあたしと、ほとんど同時よ。同じ着メロ。謎でしょ。バスが停まって、休憩時間トイレタイムにあたしが先に降りると、その人が後から追いついてきて

『小学校の時の理科の実験を思い起こしました』

って話しかけてくるの。あたしはワザと、知らんぷり。あせらない、あせらない。

『音叉おんさの共鳴実験を覚えてますか？シンクロニシティというものが、実際にあるんですね』  
ここで大きく頷いて、共感を示す。ポイントね。何にもしゃべらないの。ただ黙って歩いて行くだけで、二人の心に結ばれた糸が浮かび上がってくるのよ。

『お茶を一緒にいかがですか？』

彼の震えるような声、さぐるような目つき。あー、胸キュン。あたしは立ち止まって、にっこりほほえむ。ね、どう、どう？」

しゃべり続ける菜子。課が同じでもない。性格や趣味が特に合うというのでもない。いつか社員食堂の隅の方でお弁当を広げていたら、向こうから話しかけてきた。彼女も手作り弁当、節約のために。私はお弁当をつくるのが好きだから。話題は初日から男のこと。

「席が向かいの向山ただおくと毎日顔を合わせてる。でもなーんにも感じない。職場の歓送迎会でも席が隣り合わせ。あたしって、クジ運の悪いひとなの。彼って口下手だから、

こんな時じゃないと告白できない。ビールを注ぎながら、おずおずと迫ってくる。ウブなところが、ちよつと可愛いのよね。そりゃあ、悪い気持ちはしないわ。でもねえ……。ただおくん、次の日デートに誘ってその場でプロポーズ。『ぼくと結婚してください』。ときめかないけど、そろそろかなあ。悪い人じゃないし。仕方ないから結婚でもしようか。なんていうの、平凡過ぎるじゃない？」

休暇を取っては若い男の集まりそうなスポーツ観戦やバンドのコンサートツアーに出かけている。普段からメンズ雑誌も読んで情報は仕入れている。でも戻ってくるたびに、駅や空港の売店で買ってきたお土産と引き替えに私は愚痴を聞かされる。

「デリカシーのある人間なら、バスの中では携帯電話は切ってると思うけれど」

「そう、そうかしら」

不満な顔で私を見ていた栄子は、時計に目を移すと

「いけない。もうこんな時間だわ。課長ったら、一分でも遅れるとイヤ味たらたらなのよ」慌てて立ち上がった。空のコーヒーマグの載ったトレーをトラッシュ・ボックスに戻しながら、この人とはどうして一緒にいるのかしら、と思ってしまう。

「香織って、男っ気がないんだから」

栄子は口癖のように言っている。それだけで話し相手には十分なの？会社のこの時間だ

けのつき合い。それ以上どちらも求めない。もし私に彼氏ができたことを話したら、栄子はどんな顔をするかしら。きつと目をむいて驚くに違いないわ。

「栄子、思いこんでいるでしょう」

「う、うん」

今度は素直に頷いた。トラッシュ・ボックスの奥に食べ残しのフライド・ポテトを見て手を伸ばしそうになる。彼、食べるかしら？今は、止めておこう。あんまりいい油を使つてないっていうし。栄子、だしぬかれるぞう。

広い川の土手。斜面には芝が張られ、下の河川敷はスポーツ公園に整備されている。こちら側は住宅地。だいぶ前（といっても十数年前だけけど）、集中豪雨で河があふれ、手が挟えられて家が何軒か流された。テレビでも大々的に報道されて話題になったのに、今では誰も口に出さない。父や母は何も知らなかった。洪水の後に建てられた住宅を中古で買って、後の祭り。不動産会社の営業マンを自宅に呼びつけて、母が

「何にも教えてくれなかったじゃないの」

とクレームをつけると、若い男は悪びれた様子も見せないで

「奥さん、物は考えようですよ。それで堤防が強くなったんですから、他よりいいじゃ

ないですか。実際、この辺りの査定率はアップしてますよ」

と答えた。黙って二人のやりとりを聞いていた父は、

「それも、そうだな」

とつぶやいて妙に納得してしまった。母もそれ以上何も言わなかった。ここに越してきてから不思議と強い雨は降らない。母も洗濯物を干しながら

「空気がいいわね。助かつちゃう」

と喜んでいる。人間って、案外そんなものかもしれない。

右手に鉄橋。左奥に国道の橋。その間を川が流れ、土手の上をサイクリングロードが走っている。それが私の額縁。川幅は数百メートルなのに水の量が少ないので、河原が広がっている。朝起きて二階の窓から額縁の絵と対面し、夕方会社帰りにサイクリングロードをぶらつきながら物思いにふける。川には、何が流れているのかしら？水？それだけ？私はキャンバスに日々の気持ちを描きこみ、絵は私にその時々表情を見せてくれる。刻々と変わる世界。私も世界のひとつ。川の水も、自転車も、ウォーキングの人も、散歩の犬も、みんな一つの世界を流れている。立ち止まって見ているわたし。からだはとまっているのに、何かが私の中を動いている。それが何なのかは分からないけれど、私は感じる。

国道の橋のたもとに、下水処理場がある。サイクリングロードは窮屈そうに直角に曲がつ

て橋の下をくぐっている。アスファルトの自転車道と処理場の柵の間に、何ていうのかしら、植え込みの茂みがある。一度も花をつけているのを見たことのない、一年中緑のモヤモヤ。くるぶしが埋まるほど伸びた芝草を踏みかためた段々を下りて行くと、茂みの薄暗がりから仔猫が現れ、ゆっくりと土手を上ってくる。川は流れ、私と彼は十字に交わる。私の中の彼へ。彼の名前はミーコ。

猫のお話、それはまた別の物語。



その二

同期

交差点を右折する。いつになっても好きになれない。べつに運転が下手なわけではない。ただ後続車を意識し、直進してくる車との間合いを測るのが苦手なのだ。こんな時に限って携帯電話が鳴る。ハンドルを握る右手に上体を寄せたまま左手で助手席からとりあげる。と、案の定、会社からだった。御身大事、サラリーマンは首に鈴をつけられた犬のようなものだな、と苦笑する。カーブを切って直進し、しばらく行ったバス停のところで車を左に寄せて電話をかけ直す。留守電にはなっていないかった。

「おつかれさまです」

同僚の東の野太い声が聞こえてくる。こんな時間帯に電話してくるのは、例によつていつもの雑談か、それとも万が一、重要案件か、と頭をめぐらせていると

「難波さん、難局なんですよ。今日、お昼を部長さんとご一緒させてもらった時に、それとなくほのめかされましたん。どうやら来月の異動で、地方の営業所へ回されるそうですわ。所長の肩書き、つけてもろうて。あんまり急なもので、わたしも頭がよう回りませんわ」

「栄転じゃないか。おめでとう」

受話器から伝わるこの男の押さえた喜びを、期待されたように増幅してやりながら、力を込める。それにしても、また水をあけられるな。

「だ、どういふ〜」

「そこなんですわ。〇〇県の△△市いうて、<sup>へんぴ</sup>辺鄙なところなんですわ。難波さん、行かされたことあります？」

この男の辞書には困ったという言葉はない。単身赴任になるにしても、勇躍出かけるだろう。

「今晚、祝杯をあげようじゃないか」

とりあえずアポをとって電話を切る。アクセルを踏み直して発信させる。ハンドルが軽い。いつもの場所で、一息つくことにしよう。

バス通りから折れて住宅街を抜けると、堤防に突き当たる。昔は畑が広がっていたようだが、今では宅地が堤防の縁まで押し寄せている。幸い車を停めたあたりは、距離にして30mほど、金網で囲まれた更地が残っている。バブル期の後遺症か、それとも行政の怠慢か。いずれにしても心やすらぐ場所だ。外回りの営業で疲れると、ここに来ては休息する。エンジンを切って一呼吸おく。静けさに包まれる。ドアを開けて外に立つ。この瞬間が好きだ。まるで高さ数メートルの堤防の向こうから、川の冷気が精気といっしょになだれ落ちてくるようだ。しばらく目を閉じたまま、滝に打たれる。

東とは同期入社組だった。部署は違うが、新人研修で知り合って以来の仲だ。七泊八日の研修の初日に

「初めまして。東京太郎です。あ、しもうた。緊張して、名前間違えた。あやまちをよつたつ東京太郎と申します。これ、本名ですわ」

と自己紹介して皆を笑わせた。初対面でも一遍で名前を覚えさせる、特技だなと思った。五平餅のような顔をダブル肉まんの上にのせた関西人の落語家を思わせる、愛嬌のある人間だった。それから十数年、お互いつかず離れずやってきて不惑を迎えたが、かたや向こうは次長待遇の営業所長でこちらは相も変わらず万年主任さんか……。

少しずつ目をあける。不思議なことに、金網沿いに自動販売機が一台置いてある。誰が管理しているのだろう。自販機に向かって歩き始める。いつものやつ。ブラック。オールウェイズ、マイ・ブラック。ノン・シュガー、プリーズ。

これでも村では神童と呼ばれていた。末は博士が大臣か、と揶揄されたものだ。結局大人になつてみればタダの人。営業マン。東証一部上場の大企業とはいえ、使われる立場に変わりはない。能力では他人に負けないという自負はある。それなりの成績もあげている。自分に欠けているのは人間関係術だろうか、それとも貪欲なまでの野心だろうか。その二つともだろう。自分にはないものねだりだということが、ようやく分かってきた。

東はその点、気配り上手な人間だった。上司はもとより、部下や取引先、出入り業者にいたるまで、あいたい相対する人間には何くれとなく世話を焼いた。決してキレ者ではない。むしろ

る鈍重そうに見える。自分の能力をわきまえているからこそ、人間関係の円滑化に活路を見出しているのだろうか。穿<sup>うが</sup>った見方をすれば、そう言えないこともない。が、この男の信条は、「目的と手段を混同するなかれ。而<sup>しか</sup>して成果はおおいに受け取るべし」である。生き方が一貫しているから、人から妬みをかうことがない。相手をその気にさせ、好かれる。可愛がられる。自分も東にだけは、打ち明けられる。

早い話、毎日オフィスで「××ちゃん、かわいいお尻やなあ」と声を掛けていても、「課長さんたらっ、もう」としなをつくってかわされる。それで許される男なのである。もし自分が同じことをしようものなら、軽蔑の目で見られるどころか、セクハラで職場を追われかねない。

ガチャン。ありがとうございます。

缶コーヒーを手にとって振り向くと、堤防の上を女子高生が自転車で通り過ぎて行く。先週末、頼子と二人で行った奈良旅行を思い出す。レンタサイクルを借りて有名どころを巡った。中宮寺の半跏思惟像が良かった。正面から見ると馬面に見えるのだが、角度を変えるとふくよかな慈愛に満ちた弥勒菩薩像になる。行きつ戻りつ、何十分も飽きずながめた。帰りがけに、それまで黙っていた頼子が「キャッ！」と悲鳴を上げた。ドバトが群れ

てきて、鳩の糞までお土産にもらったのだった。こうやって妻と各地の寺社巡りを始めてどれくらいになるだろう。二人とも熱心な門徒というわけでもない。頼子はクリスチャンである。ただ仏像を見るのが好きなのだ。家で仏教美術全集をひろげて次の旅先を練る。趣味と言えるものはこれだけだ。会社で知っているのは、東くらしいなものだろう。

「夫婦善哉、ええでんなあ。わたしも定年迎えてお役ご免になったら、かみさん連れて四国をお遍路して回ってきますわ。欲の深い人間やさかい、アカ落とさんと往生できまへん」  
女は好きである。芸が細かい。

ある時、居酒屋で飲んでいて、隣で東が思い出したように手帳をパラパラとめくったことがあった。肩越しにのぞき込むと、「一子」「一子」と女性の名前が続き、電話番号や住所らしき数字が並んでいる。なじみのホステスかと聞くと、会社の女の子の名前だという。こちらはからかい半分に

「そんな事は、お手のもののパソコンで住所録に入力したらいいじゃないか」  
と言うと、東は神妙な顔になつて答えた。

「難波さん、誠のおつき合ひさせてもらおうたら、アナログですわ。営業でも同じぢやいますか？」

一本とられた。同じ課の女の子達の誕生日に、東は毎年、花束を贈り届けているらしい。

春は官公庁への納品が多いので女子大生をアルバイトに雇う。ある年、その中にA子がいた。東が教育係だった。明るくハキハキした子で、卒業後も働かせて欲しいという希望が通つて、臨時社員として採用された。東の下で働くことになった。何年かして寿退社を迎えた。東が新婦の仲人を頼まれた。席次からいつて、東の肩書きでは役不足に思われた。誰もがいぶかしく思ったが、辞めてゆく人間である。社内の噂もそれつきりになった。後で東が酒の席で

「あの娘むすめとは、アルバイトの頃から知ってましてん」

とつぶやいた。知ってたというのは、肉体関係のことである。えつ、と声が出た。東は結婚して子どもももうけていたのだ。誰にも悟られずに不倫を続ける。そんな芸当は自分には逆立ちしてもできないなと思った。

「色は匂えど恋ぬるを、誠の道は常ならん。難波さん、一度でも契りを結んだおなごは、必ず誠で返してくれませすわ。わたしも、一肌、脱がせてもらいます。こわいのは、蜂ですねん。女はきまぐれやさかい、蜜をきらそうものなら、お尻の針で一刺し。痛っ！ 気づいたときには、おしっこ手でぬつてもあきまへんわ」

こんなに手際よく見える男でも、誠と誠が鉢合わせになって進退窮まった経験があるのだろうか。女房しか知らない男には知る由もない。

車にもたれて、熱い缶コーヒを右手、左手と移し替えながら冷めるのを待つ。自転車と行き違いに、白い中型の雑種犬を連れた品のいい老婦人が歩いてくる。犬の首に吊した、放牧の牛がつけるような大きな鈴が、カラン、コロンと音を立てる。ふと、頼子と二人でどんな老後を送るのだろうか、と思ってしまう。

彼女とは大学のサークルで知り合った。現役で国立の難関校を突破し、脱力感に襲われていた頃だった。二人とも初めての異性だった。つきあい始めて程なくして、彼女は体調を崩した。病院に行くと子宮筋腫が原因だと言われ、手術するように勧められた。言われるままに筋腫を取り除くと、前よりかえって疲れるようになった。あろうことか、子どもが産めない体になってしまったのだ。精神的にも不安定になった彼女は、詳しく話そうとしなかった。自分もしつこく追及しなかった。いや、できなかった。

「私のことは忘れて」

と泣きじゃくる目の前の女を、ただ抱きとめることしかできなかった。それ以上深く考えもしなかった。向こう見ずといえれば向こう見ずかもしれない。が、それが青春というものだろう。

卒業後に結婚した。在学中に彼女はカトリックに入信していた。自分は一応志望の会社に採用になったが、受験生までのがむしゃらだった欲望を、喪っていた。



何年かして、お盆で帰省した折りに、思い切つて母に打ち明けた。頼子が家を空けた隙を見はからつて、台所で洗いものをしてしている母親に後ろから話しかけた。

「そうかい、体が悪いなら、仕方ないねえ……」

母の肩が落ちた。白髪がよけい目に入った。母一人子一人でここまで来た。大臣や博士にはなれなかったが、有名企業に就職して東京で暮らしている息子は、母の心の支えでもあつたらう。

人生には、それがどんな意味をもたらすか、その時にはよく分からなくても、選択しなければならぬ時がある。意味は、年数を重ねるにつれ浮かび上がってくるのだ。

実は先日、子宮筋腫の手術で誤つて子宮も摘出されてしまった女性の訴訟記事が新聞に載っていた。子どもの頃の自分の写真を見た気持ちになった。頼子の不妊は、手術のためだろうか。それとも生まれつきなのだろうか。何度も繰り返した自問は、もう過去のものになった。

自分は逃れなかった。それだけは誇りに思おう。べつに他人に語ることも卑下することでもないけれど。飲み干した空き缶をまた自販機の横のゴミ箱に戻しに行くように。それだけのこと。

車の助手席には、昼に食べた愛妻弁当の弁当箱と携帯電話が仲良く並んでいる。包んで

いるハンカチは、ネクタイと同じく、頼子が毎朝選んでくれる。東には

「かみさんひとすじ、うらやましいでんなあ。わたしなんか、子どもの残りもんですわ。

えらい違いや。難波さん、今度、とりかえばや物語させてくらはりませんか？」

と、冷やかされるが。

さあ、コーヒーを一息に飲み終えたら、今日は遅くなると、連絡しよう。

その三

箆たんすの抽斗ひきだし

## サルビアの赤

「千恵子さん」

えっ!? 耳を疑った。夫から「さん」づけで呼ばれるなんて、初めてじゃないかしら。新婚時代は・・・もう思い出せないわ。

「このワイシャツと合うかな」

中腰になって鏡を見ている夫は、わたしの方を横目でうかがいながらお伺いを立ててくる。いつもそうなの、この人は。何か下心があると、イタズラがばれやしなやかと母親の前でびくびくしている子どもに戻ってしまう。小さい頃からの？クセというには悲しすぎ。はぐらかされ続けてきたこの人との二人三脚。手の中で、葉書がたわんでくる。

お寺さんから改葬公告よ。

かいそう？ 広告？

お寺の敷地がバイパス工事にかかって移転するそうなの。

あの寺は、移転してももたんだらう。そのうち兄貴が何か言って寄こすさ。

故郷の墓を守る、義兄のしわの刻まれた顔が思い浮かぶ。几帳面なカナ釘文字で書かれた便箋も。この兄弟は、ほんとうに電話で話さないのね。何かあると、手紙でやりとりをする。

寺は隣町の別院に統合される運びに相なりました。墓地だけは村内の適地に移るということですから、ご心配無用。時節柄、御身体にはお気を附け下さい。境内の松が一気に枯れてしまいました。寂しい限りです。

伸一の結婚式で訪れて以来だから、何年振りかしら・・・。お義父とうさんが元気でいらした頃は毎年のように帰省してたのに。お義母かあさんにあんなことがなければ——魔が差したとしか言いようのない、冬のお風呂場で転倒して頭を打って数日後に亡くなった。もう何年も痴呆状態のお義父さんを看病してらしたお義母さん。誰が看る、老人保険施設に預けたらどうかと兄弟の間で話がたらい回しになっている間に、お義父さんも後を追うように息を引き取った。その方が良かったのよ、今から思うと。お義母さんは、よくしてくれたわ。畑で何々が採れた、お米の稲刈りが済んだと言っては段ボールに一杯詰めて送ってくれた。そんな定期便が途絶えると、盆正月の帰郷の足も遠のいて、冠婚葬祭が親類縁者の絆、と母が言っていたのは本当だわ。それにしてもお義兄にいさん夫婦、子供もないのによくあんな辺鄙へんびな所で・・・。

夫は薄い髪の毛を梳くしりながら、左手で頭を押さえたり左胸に触れたり腰に当てたりとせわしない。無意識なんでしょうけど、お見通しよ。下手なブロックサインなんか見破られるのが落ち。

数日前、夫の書齋に掃除に入つて、鴨居に吊してあるブレザーに目が行つた。襟元を直そうとして自然に胸ポケットに手が入つて——洋封筒を取り出していた。中には写真が数葉。探鳥同好会のものなのはすぐに分かつた。夫が定年後に行き始めた趣味のサークル。並んで記念撮影。羽ばたく鳥。葦原の奥から窺う目。一枚の写真で目が留まつた。若い女が後ろから夫に抱きついてる。夫のはち切れそうな笑い。咲さかと同年ぐらい？いいや、もつと若いわ。大学生か、勤め始めて二、三年……。探鳥会での自然なスナップショット、と言えなくもない。手元を繰ると、集合写真でやはり夫はさっきの女と並んで写つていた。二枚を見くらべる。残りの写真が足許に落ちた。嫉妬？いいえ、嫉妬なんかじゃないわ。今さらあの人に嫉妬してどうするの。恋愛事なんか、したくてもできない人。妬み？うーん、そうかもしれない。笑つてる。笑つてる。この謹厳な人が。つつがなく仕事を勤め上げて教頭で終え、退職後も町内会の副会長の役を引き受けて——本人は押しつけられたなんてボヤいてたけど、内心はうれしんだから——如才ない笑顔には長けていたこの人が、家では見せたことのない顔で、心の底から、わ・ら・っ・て・い・る。

## 目に満面

何だかおかしいわ。それにユニクロのパンツ。夏に伸一が奈美さんと家に泊まっていた時、洗濯物をたたんでたら若向きの縦縞のトランク스에気がついた。

「お父さん、伸一の忘れ物ですよ」

居間で夕刊を広げていた夫に両手でつまんで見せると、ばつが悪そうに

「俺のだよ」

と横目で答えた時の、あの顔ったら！笑、笑、笑。

老いの一瞥がこの娘にはない。初めて深い息を吐いて、唾を飲んだ。父親ほどの年齢の男だから？まるつきり異性の対象と見てないから？それならなおのこと、老いに対する侮蔑の眼差しをくれてやるだろうに……。

あの女、岡田さんも、そんな眼差しに救われたのかもしれない。すぎる、と言っちゃあ、何なんだけど。元木さんと石井さんの三人でお見舞いに行った時、手術も済んでもうすぐ退院できる、それだけの嬉しさではないものを表情に見てとったのはわたしだけかしら。看護婦詰所で病室を聞いた時の、若い看護婦さんの私たちを見る目。言葉使いは丁寧だったけれど、老いの一瞥、そのものだったわ。

「病院に來ると、それだけで気が滅入るわよねえ」

元木さんの言葉に、わたしも石井さんも大きく頷いた。ベッドに横たわった岡田さんも

さぞや・・・と思つてドアを開けたら、満面に笑み。わたし達の方が拍子抜けしちやつたわ。「——さん、男と駆け落ちしたらしいわよ」

夏も過ぎて秋風が立ちはじめた頃、遅れてわたしがコミュニティセンターの句会に駆けつけたら、廊下で誰々さんと誰々さんが立ち話をしていて、わたしは名前を聞き取れなかつたけれど、岡田さんだと直感した。わたしの尋ね顔に、元木さんが頷いてみせた。それきり句会で岡田さんの話題が上ることはなかった。派手好きの女将おかみ。一人、浮いた存在。ご主人と息子さんの家族経営で割烹屋を営む。それなのに二十も年下の常連客と、退院したその足で家を出てしまった。臍臓を切り取つたぐらいで、人間はそこまで変わるものなのかしら。わたしは、わたしは・・・

わたしにはできない。あなたにプロポーズされた訳でもない。一緒に行こうとさそわれた訳でもない。一度二人でお茶を飲んだだけ。あの人はコーヒーカーップには手をつけずに、煙草ばかりくゆらしていた。駅前商店街の二階にある喫茶店の隅のテーブル。アーケードの向こうに、曇り空が見える。わたしは口頭試問を受ける受験生のように、椅子に腰かけていた。国家公務員の郵政職の二次面接を思い出していた。

○○○○、××××、△△△△

わたしには初耳の画家の名前をあの人は次々に口にして批評した。前衛作家なのだろう、



と思った。絵が特別好きでもなかった。勤め始めて二、三年、郵便局の仕事にも慣れた頃、無性に職場とは違う人間関係を持ちたくなかった。下宿先の伯母さんにすすめられて、市の美術愛好会に入った。展覧会巡りやモデルを囲んでのデッサン、お互いの作品の批評会……どの会場でも、わたしは隅の方に隠れるようにしていた。あの人は長髪で声が大きく、どんな時にも自分の言いたいことは言う、意見のない時は押し黙っている、存在感のある人間だった。お茶でもどう？と誘われた時、何故、私に、という疑問がまず浮かんだ。身を固くして、時間の過ぎるのを待った。

「——さんが洋行したそうよ」

喫茶店で会ってから、ぷつぷつりとあの人は来なくなり、旅立ったという噂を耳にした。わたしには見合い話を持ち込まれ、親戚宅に間借りして公務員ならという条件で東京行きを許してくれた田舎の両親が「堅い人じゃないの、千恵子」——乗り気になって、この人と結婚した。二人の子をもうけ、狭いながらもマイホームを手に入れて、あとは咲子の結婚と初孫を待つばかり……。

伸一を産んだ頃からかしら、美術雑誌を購読し始めた。結婚する時に、イーゼルや絵筆は処分していた。夫はわたしが外へ出るのをとてもいやがった。それは杞憂よ。わたしはあの男の名前だけを探していたの。あの時は好意のかけらも感じなかったのに、子どもの

成長とともにわたしの中でおおきくなっていった固有名詞……。あの人と一緒になつていたら、今頃どうしてたかしら……。ヨーロッパの革命的な芸術運動の渦に巻きこまれて、わたしには絵の才能なんてなかったけれど、私のドラマはどんな展開を見せていたんだろう……。

二十年、三十年、あの人の名前は世評に上ることはなかった。私の夢想も、定年退職した夫と二人で、ヨーロッパに記念旅行をする。フランスのブルゴーニュ、とある古城を改造したレストラン。そのシェフから「ボンソワール、マダム。お久しぶりですね。」と笑顔で迎えられる……。そんな内容が変わっていた。

夫は、退職金は老後のために貯とっておこうと言い張って、とうとう旅行には行けずじま  
いだった。咲子は運良く大卒後に就職した会社を辞めてニューヨークに語学留学してしま  
った。もう三十でしょ。奈美さんは外資系のキャリアウーマン。子どもは作らないの？  
こちらは三十五か。わたし達の老後は、誰がみてくれるのかしら？

「お前、もう子どもには頼れん時代だよ」

それならわたしも好きなことを始めますよ。お父さんが寝たきりになつても知りません  
からね。

「俺は健康だよ。野山を歩いているからな」

わたしも毎日、犬を散歩させてるわ。

## 秋の空

「お父さん、きのう川の土手で猫が死んでたんですよ」

「う、うん」

夫の生返事に次の言葉を口にする意欲を失う。お腹に、ナイフが刺さってたんですよ。薄気味悪い。

「五時には戻る」

夫に付き従って玄関まで見送る。わたしには、できなかつた。できそうもない。仕方ないわ。これが私の人生。



その四

水路（一）

元來、運動は得意な方ではない。かといって全然だめだというわけでもない。小学校の運動会でクラス対抗リレーの代表に選ばれることは決してなかったが、駆けっこから外されて団体競技の一員に申し訳程度に入れられる、そんな運動オンチでもなかった。概して言えば、中の下、と自分では踏んでいる。成績は、上の部類であったが。

中学では全員参加のクラブ活動があつて、さて困つた。理科の実験室の隅の方で標本をあきずにながめていたり、音楽教室の後ろの席で指で机をたたきながら上の空で時間をやり過ごす、そんな文化部の活動だけでは許されず、運動部にも一つ入らなければならぬ規則なのである。仕方ないので、ソフトボール部を選んだ。男子でソフトボールとは珍しいが、要するに学校側が逃げ場のない生徒のために用意した託児所のようなものだと思つて分かつた。子供を預かる保育園にももちろん、長幼優劣の序列はある。

ソフトボールに特に縁があつたわけではない。たまに父親が家に早く帰つてくると、夕食の時間にTVでプロ野球を観ながら新聞のスポーツ欄を開いている。忙しい仕事の息抜きなのだろうと、子供心に同情したものだ。今でも思い出すのはアルバムに貼られた幼い頃の家族写真である。どこかの公園の芝地で父親とキャッチボールをしている。かしこまった表情で振りかぶっている父親が、ひどく若い。グラブを差し出して球を受けている男の子も、気恥ずかしくなるくらい笑顔で写っている。カメラを向けたであろう母親も含めて、

典型的なマイホームの匂い立つ写真だ。普段はカップボードに収められているアルバムも、来客があつた時などに証明書アリバイとしての価値を持つ。家族とはそんなものかもしれない、と二児の父親になつた山根は思う。

山根の住んでいる職員宿舎は、二棟、三十数世帯が入居しているが、所帯持ち用は一階に集められ、後は单身者専用になつている。入居者は寮として一括して町内会に入っているのだが、管理人は既婚者が持ち回りで勤め更に町内会とのパイプ役も兼ねるという慣わしである。異動の多い单身者を除くというのは、理にかなつたやり方だと山根も思う。公報の配布や集金、年に数度の会合への出席、それも十年に一度巡ってくるお勤めと割り切れば、こなせないこともない。

もし今年、山根が管理人の役に就いてなければ、町内対抗のソフトボール大会に出てみよう、という気も起こらなかつたであろう。宿舎まで広報紙の束を抱えて来た副会長さんから——たまたまその日は非番で家に居た山根が応対に出て——「選手が足りなくて困つてましてね」と暗に懇願されて、断り切れなかつた、という事情もある。今は退職して町内の世話役をしているという初老の男の視線の先には、玄関の下駄箱の上に放り出されてあつた長男・雄馬のクラブとバットがあつた。

「祖母が子どもの誕生日に買い与えたもんです」

言い訳とも何ともつかぬ、相手の耳には届かない言葉を口の端にのせながら、山根は、自分と同じようにやせてひよろひよろしているが手だけは大きな雄馬のクラブを借りれば、新たに買わなくて済む。それに練習と本番の二日つぶすだけで済むのなら、弁当も支給されることだし行ってみようか、と頭の中で素早く計算していたのだった。

試合は一勝一敗、準決勝に進出することもなく敗れ去ったが、それなりに楽しめた一日だった。山根は九番ライトで先発出場し、ごろのヒットを無難にさばき、フライを一度落とし、ファウルグラウンドで好プレーを演じた。打つ方はエラーで出塁一回と、送りバントを決めただけだったが、ゲッツーをくらったりしてチームに迷惑をかけることもなかった。山根が意外だったことに、副会長の言げんとは裏腹に、チームメンバーは十数人おり、中核は毎年出場している「常連さん」が占めているらしいこと、試合前の軽い練習で山根の実力は知れたものだったのに、フル出場させてもらったのである（実は本番一週間前の練習日は、長女の夢美ゆみが熱を出し妻も出勤にあたっていたので山根が家で看病せざるをえなかったのである）。ピッチャーやキャッチャーといった要は常連が押さえていたが、後は皆から「監督さん」と呼ばれていた恰幅のいい男が采配を振るっていた。誘われるままに山根は残念会に出席し、この男が大林建設の社長であると耳打ちされた。山根はその土建会社は名前だけは知っていた。というのも、自宅近くでよく利用するガソリンスタンドのすぐ



裏手に、大林組と看板を掲げた二階建てのビルと資材置き場を見ていたからである。

それが春の行事だった。そして夏の盆踊りや子ども会の廃品回収を経験し、山根は、ソフトボール大会が新役員の親睦を兼ねていたことを理解した。女性の役員が好機にピンチヒッターで指名されたりしたのも、勝負は二の次だったからだろう。ソフトと並ぶレクリエーションの目玉が、秋の健民大運動会だった。その最後を飾る対抗リレーに、山根は自分から進んで選手で出ましよう、と肝いり役の副会長に申し出たのだった。日頃全く関心のなかった地域の活動で何か役に立つ、そんな子どもが誉められた時のようなうれしさが芽生えていた。

そうと決まれば用意周到な男である。さつそく近くの川べりの土手を走ってジョギングを始めた。目標を立ててそれに向かって一つ一つハードルを乗り越えて行く。小さい頃から進学塾で身につけた人生の対処法だった。努力は実を結ぶ。今の自分はその結果として、ここにある。雄馬も四年生だからそろそろ私立中学の受験準備に入らなければ・・・。

そんな想いを頭の中で巡らせながら、残暑も失せた初秋の土手を走っていたある日のことである。下水処理場の手前まで来て、堤の下の水路脇に、男がうずくまっているのが目に入った。この道は自転車道路になっていて、朝夕の“お散歩タイム”や週末には混み合う程だが、平日の昼下がりとともなると学校帰りの生徒か遠くの河面を目をそばめて見やつ

ているあてもない老人の姿を見かけられるくらいなものである。それに、男の盛り上がった背中には、確かに山根の記憶に刻まれたものがあつた。〈愛の鐘、鳴り響け〉となぐり書きされた派手なプリントの黄緑のウインドブレーカーを、男は着ていたのである。大林であつた。普段ならその程度のつきあいの人間を見かけても避けるようにして立ち去る山根であるが、運動会でまた一緒になるであろう大林には、一声かけておかなければいけないような気持ちが湧いてきた。

「大林さん、こんにちは」

踏みならされて階段になつた堤を下りながら山根が挨拶すると、初めて気づいたのか面をあげた大林は、「お前、何者だ？」という表情をして山根を見た。山根は気後れしたが、笑顔をつくつて続けた。

「山根です。ソフトボール大会ではお世話になりました」

大林は、丸顔の円い目をクリクリさせて記憶の中を探っていたようだが、やがて目の前の人物と名前が一致したか、破顔一笑、立ち上がった。

「おお、お疲れさん」

山根はこの大柄な男の前に立つと、ジャージを着た自分がひどく貧相に思え、ドジをふんで怒られている子どものように申し開きをしなければいけないような気持ちに襲われた。

「来週の健民運動会の選手に選ばれて、練習してるとこなんです。足は早くないんですが、皆さんに迷惑はかけられませんからね。ところで」

と、山根は話題を大林に振った。

「大林さんはこんなところで何をされてんです？ドブに落とし物ですか？」

ニコニコして聞いていた大林は、ニヤツとして水面を指さした。

「メダカだよ」

「えっ!？」

大柄な男と小魚の取り合わせに虚をつかれて、山根はスットンキョウな声を上げた。

山根はエコロジストである。自分では意識的な地球市民の一人と位置づけている。職場のエコ倶楽部に属し、自然探索会には子どもたちを連れて積極的に参加していた。21世紀は環境の時代、子供にはグローバルな観点に立てる人間に育ってほしいと願っている。仕事とは専門を異にするが、環境問題の雑誌を何冊か購読し、ボータス時にはいくつかの市民団体に寄付も行っている。車はエコロジーに熱心に取り組んでいるメーカーを選んでいく。その山根の知識には、メダカは環境庁の絶滅危惧種に指定され、都内にはすでに棲息していない、という情報がインプットされてあった。秋空に大きな雲がかかり、一瞬あたりが翳った。山根の顔からも、微笑が消えた。

「こんな所にメダカが棲息してるんですか？」

山根の口調には非難めいたものがまわりついていた。

「オレが放ったんだよ。見てみな」

大林は無頓着に腰を下ろした。山根もつられて膝を折った。

そこは不思議なことに、小川の雰囲気を残していた。処理場のフェンス沿いに流れてきた水路が、土手の下を土管を通って大川に排水される、その手前ほんの数メートルだけ、コンクリート打ちされずに土がむきだしになっている。土管の口には仕切り弁のようなものが取り付けてあるので、水は澱み、深さ数十センチの淵をつくっている。存外、メダカには向いた環境かも知れない、という思いが山根の頭を過ぎった。ヒメダカだった。人影が映つてもおそれない。十数匹が頭を川上にそろえてたわむれていた。

「このメダカ、どうしたんです？」

そう言ってしまった後から山根は、愚問だ、問題の本質はそんなとこにないと後悔した。

「得意先にもらったもんだが、子どもが増えちまってよ。見ろ、かあいいもんだぜ」

そういえばソフトボールの打ち上げの席で、「誰かメダカをもらわんか」と大林が上機嫌でしゃべっていたのを、普段飲み慣れない酒をビールのジョッキですすめられて、おぼろげな記憶にとどめていたのが、あぶり絵のように浮かび上がった。その時

「ニャ〜〜オ」

という猫の鳴き声があった。山根が顔を上げると、水路の向こう岸の繁みに、仔猫が潜んでいた。捨て猫なのだろう、じつとこちらを窺っている。

「猫ちゃん、食べちゃいかんよ」

大林が不釣り合いな猫なで声を出した。手は、おいで、おいでをしている。メダカに捨て猫、人間の身勝手な振る舞いが、環境悪化を招く。山根は不意に立ち上がると、努めて冷静に口を開いた。教師口調になっていた。

「メダカは環境庁の絶滅危惧種に指定されていて、飼つてはいけません。みだりに放流してもいけません。遺伝子の混交が行われて種としての純粋性が保てなくなるからです——」  
円い目をなおのことまるくして山根を見上げていた大林は、体つきに似合わない敏捷な動きですつと腰を上げると、皮肉な目で言った。

「さすが都庁のお役人の言うことは違う。あんた、どこの大学出てんのや」

「〇〇大学です」

山根は言葉を選んで相手に対した。

「ほう、国立か。たいしたもんだ。町の土建屋とは大違いや。なあ」

人を小馬鹿にしたような大林の口調に負けまいと、山根の体が強ばった。大林の目が角

張った。

「あんちゃん、祭りにや、金魚すくいがつきものだろうが。楽しけりや、それでいいんだよ。違うか」

大林のドスの利いた声に押されて山根の体が後ずさりし、目の隅で大林の右手がゆつくりと上がり、殴られる、と思つた瞬間、大林は

「アバヨ」

というふうに繁みに手を振ると、クルリと向きを変えた。

「シンキくさい顔しやがつて、おまえ、一度でも腹の底から笑つたことあんのか」

大林は背中で大口を開けて笑つた。水路沿いの小道を高らかな笑い声をあげて遠ざかる大林の後ろ姿を、山根は茫然と立ちつくして見送つていた……。

どこをどう車を運転して帰つたのか、山根は頭の中が白紙になつたようで分からなかつた。気がついたら家に着いていた。よく車をぶつけなかつたものだ。それにしても大林の論理はメチャクチャだつた。縁日の金魚すくいとメダカが、どう結びつくというのか？赤い、というだけで、何の共通性もない。それとも金魚もあそこに放流しようとしているのか？あの男ならやりかねない。中卒か高校くらいしか出てないのだろう、あの頭の程度では……。

コーヒーを飲んで気を落ち着かせようとした。あれ程子供扱いされたのは生まれて初めてだった。大学のゼミで一度、研究生と口論したことがある。その時は山根は自分に論理的に非があると認めて素直に謝った。今度は違う。環境破壊は人類に対する罪なのである。どうしたらあの男に分からせることができるのか？バカとはかかわらないほうがいい、という内心の声もしたが、エコロジストとしてそのまま見過ごすことはできない。

とりあえず大学で同じ研究室にいた斉木に電話してみることにした。斉木は河川管理課に勤務している。

「下水道にメダカを放流？ウチの管轄じゃないなあ。公園課に t e e してみたら」

山根の熱っぽい訴えを黙って聞いていた斉木の反応は、つれなかった。改めて電話をかけ直す意欲を、山根は失っていた。

夕方、保育園から夢美を伴って妻の房枝が帰ってくるのを待ちかねていた山根は、たたくみかけるように事の顛末てんまつを話した。房枝はスーパリーの袋から食材を取り出しながら黙って聞いていたが、

「ヒメダカって、観賞用よね」  
と顔を向けた。

「そうだよ。江戸時代に突然変異で生まれたのを固定したんだ。フナからヒブナが生ま

れて金魚に品種改良した。あれと同じさ」

「自然界じゃ生きていけないんじゃないかしら」

冷蔵庫に食品を押しこみながら房枝が言う。

「え？」

「赤いから目立つて、鳥に食べられちゃうとか」

妻は実際的な人間だった。山根の傷ついた心には別段関心を示さずに、それだけ言った。落胆したものの、山根は気をとり直した。そうだ、結果がすべてを示すだろう。そこから学ぶか学ばないかは、あの男の頭次第だ。一日も早く行動した方が、あいつの為にもなる……。山根はパソコンのスイッチを入れた。居間で、夕食を待ちきれずに房枝のあてがったビスケットをほおぼっていた夢美が、急に会話に割りこんできた。

「ねえ、ね、ブラジル人の子ども、見たことある？」

「ブラジル人？ないわねえ」

房枝が流して背を向けたまま答える。山根はそれとはなしに聞いていた。

「ブラジル人の子が、どうしたの？」

「手も顔も、まっくろ」

「保育園の、お友だち？」



夢美はそれには答えずに、口の中にビスケットをつめこんだまま、キュツ、キュツと笑った。「チョコレートみたい。気持ちワリー」

保育園で覚えてくる、汚い言葉つかいで夢美がおどけた。山根は反射的に口をはさんだ。「仲良くしないといけないよ。みんな、同じ人間なんだから」

山根の手は、メダカをすくう網をかう。ペットショップを検索して、マウスをせわしなく動かしていた。

翌日、昼休みにあわせて二時間の中抜けを山根はとった。年休届けを出す時、上司には保育園の用事で、と誤魔化しておいた。

運良く、最初の熱帯魚店でメダカの飼育セット一式を手に入れ、次のホームセンターで虫取り網をセール価格で買った。魚取り用ではないので心もとない気がしたが、二度と使うこともないのだからこれで十分だろう。

念のために、用心をして、山根はサイクリングロードから近づかず、大林が昨日立ち去った水路沿いの道を歩いて行った。幅一メートルもない、三面コンクリートばりの、何の変哲もない水路である。水はきれいとは言えないが汚くもなく、それでも魚影は全くなかった。ジャージの上下に長靴、手には網を持ち、家から用意したバケツを下げている姿

はまるでドブさらいだな、と山根は独りごちた。

バス道路の下を暗渠でくぐった水路は、やがて下水処理場にぶつかり、大きなカーブを描いてフェンス沿いに大川へ向かう。あの澱みが望める地点まで来た時、山根は母子連れを見た。しゃがみこんだ母親が、夢美くらいの女の子に話しかけている。堤防の上にはバギー車。散歩の途中だろうか。山根は対岸の繁みに大林が潜んでないか窺ったが、それらしい人影はなかった。靴音を立てないようにして山根は親子に近づいた。

はあるのおがわは

さじさじ

いくよ

川風にのって、母親の歌う声が聞こえてきた。近づくにつれて、歌詞が変わった。

めだかの

がっこうは

かわのなか

女の子もうんちスタイルで、水面をのぞきこんでいる。ほんの数メートル手前まで来た時、山根は、ジーンズをはいた母親が足元の雑草をちぎって笹舟をつくり、水に浮かべているのに気がついた。オオバコやギシギシの小舟は、ゆっくり、ゆっくり円を描きながら、排水溝に向かって流れて行く。山根は更に踏みこんでいいものかどうか躊躇した。女の子が気づいて振り向き、訝<sup>しづ</sup>しげな目を向けた。母親は「こんにちは」というふう<sup>ふう</sup>に軽く会釈したが、声を落として歌い続けた。

対岸で何か動く気配がして山根が顔を向けると、あの捨て猫が尻を見せて藪の繁みに逃げこむところだった。今まで黒い石のようにうずくまっていたので気づかなかつたのだ。猫の通り道には、愛の鐘、鳴り響けと書かれた、公園の花壇で見かけるような白いプレートがさしてあった。

ほら

みみをすましてごらん

そら

きこえるでしょ

いのちのささやき

山根の知らない歌詞だった。かつて聞いたことのない、これからも決して聞くことはないだろう、母の子守歌を耳にしているような錯覚に襲われた。女の子はじつと山根をみつめている。赤いオーバーオールに三つ編みが可愛い。オレはこんなところで、何をしているんだろう……。山根は場の雰囲気飲み込まれて、何か言わなければという思いは募ったが、言葉が浮かばなかった。その時

「ニャーオ」

と繁みから猫の鳴き声が出た。山根の手が反射的においでおいでをした。

「あつ」

女の子が叫びを上げた。山根が土手に置いたバケツがゆっくりと傾いて、ポチャツとい  
う音をたてて水路に落ちた。メダカの輪が乱れた。  
風が、抜けた。



その五

アルーフレッドの星の群れ

アルーフレッド星群ラピード様

聖子

危険の感覚は失つてはならない、とあなたはおっしゃいます。今、この時にも、邪悪なものが地球という小惑星を周回し、攻撃をかけてくるかもわからない。常に危険に備えよ、とあなたは諭されます。一瞬、一瞬、意識的でありなさい、と。

私は、顔が見えてきました。私をとりかこむ事物たちに潜む顔、顔、顔。校舎の階段脇の壁のしみ、机をナイフで削ったような痕、家の天井板の木目の文様……。私は囲まれている。私は見られている。私は気を研ぎ澄まして、対向しています。あなたの言葉に、耳を澄まさせています。

それにしても、あの男は何者でしょうか？

ラピード様

屈辱は、選ばれた人間が耐えなければならぬ勲章であるとしたなら、私はよろこんでその重荷に耐えます。それが分からぬ人間には、首から不細工なヘンテコリンを下げていくように見られても、私はへっちゃら！です。ラピード様、いつもあなたがついていてく



ださるのですから・・・。

「聖子って、清く正しく美しくって、まーるで宝塚路線よね」

体育の時間が終わって、教室で着替えをしている時に、手早く着替えを済ませて手鏡を見ながら化粧を直していたブタ子が、隣の席のロバ子につぶやきました。始めから、魂胆は見えずいています。私をわらいものにするためです。

「そうよねー。みめ醜女しごめにして、足は七草、大根の——」

ロバ子が二時限前の古文のじじむさんの口調をまねて言うのと、教室中が笑った。トイレから戻ったばかりの私は、ラピード様、危険なものを感じて、踵かかを返して水飲み場に戻り、手を何度も何度も洗って、汚れを清めました。

あの二人が、援交エンコで身を崩しているのは、学校で誰知らぬものがない噂です。ブタはやせてもブタ、残飯でも鼻でほじっているがいい！愚鈍なロバよ、かわいそうな人生。あらまあ、お二人してどこへ？ぬるぬるべらりとした、のっぺらぼうの、薄汚いまどろみ。私はまっぴらよ!!

それにしてもラピード様、夢で見るあなたの瞳は、深い湖の静謐をたたえた、どこまでもどこまでも私を射抜いて包みこむ、若い漁師のような目でした・・・。

ラピード様

今日は私の生涯で最大の危険との遭遇を報告しなければなりません。いえ、遭遇なんかではなく、仕組まれたワナでした。壁から、いつも私をうかがっていたあの男の。

通学の電車の中で、いきなり男が私のスカートの中に腕をつこんできたのです。満員電車の中で、揺られている時から、私のうなじに熱い息を吐きかけていたのですが、私は耐えていました。毎日毎日、耐えてきました。選ばれた者として、ラピード様、あなたの言葉を守つて。でもあの男は私の沈黙をいいことに、凶にのつて攻撃をしかけてきたのです。

ガクン、と電車が停まり、駅に着き、乗客がしぼりだされるようにドアに向かい——その時、抵抗できない圧迫感の中で、卑劣にもあの男は、私のスカートをめくり、パンツをこりこりしたのです。

ホームに押し出されて、降りる客、乗りこむ客、発車のベル、揺れる人波、何が何だか分からなくなつて、パニック状態で、気がついたら私はあの男のカバンにむしゃぶりついて、ホームを引きずられ——その時、膝をすりむいて後でバンドエイドをはつてもらったのですが——半ベソになつて叫んでいました。

「痴漢、痴漢、助けて」

怒濤のようなホームの上で、一瞬、真空地帯が生まれて足がいくつかが停まり、輪のよう

になって

「警察を呼べ」

「駅員は向こうじゃないか」

天上の方で声が聞こえ、いがぐり頭の大学生かフリーターか、小さなディパックを背負った小柄で柔道でもやってそうなお兄さんが輪をぬけて

「おじさん、いい歳して、何してんだよ」

「何するんですか。止めて下さい」

あの男ともみあって、いつの間にかあの男ははがいじめにされていました。

「お嬢さん、だいじょうぶ？さ、気をとりなおして」

親切そうなおばさんがハンカチでスカートのほこりを払って私を助け起こしてくれました。

ラピード様

それからはまるで映画でも観ているように、私の身体はスローモーションで流れて行きます。駅の階段を昇ったり降りたりして、奥の方にある鉄道警察の詰め所に連れて行かれ、私は放心状態で名前や住所、学校名を聞かれる。あの男は青ざめた顔に緊張で引きつった笑いを浮かべながら

「分かるように説明して下さいよ」

「何も、してやしません」

事務机で調書をとる警察官と押し問答を繰り返している。

場面は一転。

ガラガラッと音がして詰め所のガラス戸が開くと

「何だ、こいつ？」

という視線を一身に浴びて、若いスーツ姿の男が、入ってきたのです。

「あの——」

サラリーマン氏は胸の内ポケットから名刺を取り出すと、上司らしい腕組みをした警官に差し出しました。

「△△プロダクション？」

で、オタク、何の用？という警察官の質問を先取りするように

「すみません。僕、さつつきの電車で、押されて、これでその子のお尻を」

と言って小型の細長いバッグを両手で持ち上げてみせたのです。

「それ、何ですか？」

先程から強い口調である男に迫っていた下っ端の警官が、好奇心まるだしで聞きました。

「撮影用の機材なんです、携帯用の」

スーツの男はジッパーを引いて中からカメラの三脚のようなものを取り出しながら言いました。

「悪いな、と思いながら、打ち合わせの時間が迫ってたもので。でも一駅先で下りて、引き返してきたんです。すみません、ご迷惑をおかけして」

しらっ、ですよ。私は一人芝居を演じたようで、恥ずかしくて恥ずかしくて、身を硬くしていました……。

「ちょっと、河岸を、散歩してみませんか」

年齢は三十以上五十未満、若くも見えるし白髪まじりの髪が年相応にも見える。年齢不詳のオジサン。やせぎすの体にダークグレーの背広。手には何が入っているのか重そうな茶のブリーフケース。興ざめな映画を観終わった後のようにダークな気分で鉄道警察の詰め所を出た時、あの男から声をかけられてコックリうなずいたのは、一言、謝らなければいけないと感じていたから。

もう一時限目の授業が終わって二時限目に入っている。教室の窓からものうい教師の声がもれてきて、グラウンドではそだけ活発な、白と紺の運動着がゴムまりのようにはねて

いる。そんな学校の光景が目には浮かぶ。あたしは、独り。

「事件性はないので、帰らせますから」

学校に連絡をとっていたお巡りさんが電話口で説明していた。生徒指導の教師が職員室で待つてゐるだろう。でも、いいや。

駅の裏口の、自転車やらパチンコ店やらカラスのつづいた青いビニール袋やらゴチャゴチャした小道を抜けてガードをくぐると、すぐに大川の堤の上に出た。何を隠そう、私もこのサイクリングロードを自転車で乗って通学路に使っていたのだ。学校と駅との間だけ。それなのに新しく選挙で選ばれた市長さんが放置自転車の一掃とか何とか言い出して、駅の近くには危なくて停められなくなっちゃったから、止めた。オジサンの後を歩いて行く時に気がついた。スーツはクリーニングに出したばかりのようなのに、靴がくたびれている。オシヤレは足元からよ！

しばらく無言で歩いてから、オジサンが土手の芝草に腰を下ろした。私も少し離れてすわった。土手の下には赤土のグラウンドが広がって、男たちがサッカーに興じていた。私は通学カバンをスカートの前に置いた。

「僕には子どもはいないんですけど」

この男は話し始める時にはにかなだような笑いを浮かべる。いつも同じ電車の同じ車両

の、人間の壁の中に困ったような表情で立っていたあの男からは想像ができなかった。言葉づかいも、バカ丁寧だぞ。

「もし子どもがいたら、何を伝えられるだろうと、この頃思っんです」

オジサンは言葉を切った。私は隣の男を意識しながら、光る河面を見つめている。過ぎ行く夏と、来たりくる秋が、じゃれあうライオンの子のようにからみあいながら流れてゆく。オジサンはグラランドの方に目をやってるけど、選手の動きやボールを見てないな、と私は感じた。

「大学を出て三十年。同じ会社に勤めてきて、三十年かあ……。総務課というのは会社の内情が手にとるように分かるんですね。自分が会社を支えているという自負はもちろんあったんですが、逆にリストラにあって、何も言えなかった……」

そう、おじさん、首になったの。私は制服を見れば一目で私大にエスカレーターで進めるお嬢さん学校に通ってると思われるけれど、父は何年も外国へ単身赴任。母は心の病つていうやつで入退院を繰り返している。私はおばあちゃん子で、弟は登校拒否。結構、フクザツなのよ。

「会社っていうのは不思議なところで」

オジサンはちらと流し目のように横目で私を見た。

「辞める時も辞令をもらうんですよ。今日がその日なんです。僕にできたことは、辞表を出さないこと。それが精一杯の抵抗だった。最後の日に、退職辞令と刺し違えて出します、と社長に約束した。辞表に何て書こうか——一般的には『一身上の都合により』って書くんですが、思いの丈を何十枚も書き連ねようか、それとも白紙か、バカ野郎！の一言か、さんざん思い悩んで、今、ここにあるんです」

オジサンは、膝の脇に立てたブリーフバッグをポンポンとたたいて、何が楽しいのか、おかしそうに笑った。

「だけど、大事なものは文面なんかじゃない。そんなことじゃない。今日あなたにしがみつかれて、気づかされたんです」

この男は、初めてまともに私を見ました。目は笑っていないかった。ラピード様、私は思わず顔を伏せました。

「声を上げること。ただ、それだけのこと」

私の目の片隅で、オジサンのふしくれだった指がギュッと草をつかみ、ちぎった。

「社長は、イライラして待つてるだろうなあ。何しろ、典型的な中小企業のワンマン社長ですからねえ。ハハハハハ」

おじさんが笑いやむと、静かな時間ときが二人のまわりに訪れて澱んだ。



「最後の瞬間に、僕は何て言うんだろう。泣き出すか、社長と肩を抱き合うか、お世話になりました、か……。楽しみだなあ。さ、行きましょう」

心配を感じて、私はあわてて言った。

「あとう……。スイマセンでした」

「え?! ああ、もういいよ」

おじさんは笑顔で言うと言ち上がった。

私の前に立つ、年齢不詳おじさんの背広の肩から手が伸びて、雑草が放たれた。秋の川風にのって、草は舞う、舞う。土手をすべるように落ちて行く。

ラピード様、私の報告はこれでおしまいです。長かったあ、今日の一日でした。お休みなさい。



その六

水<sup>すい</sup>  
命<sup>めい</sup>

吾が邦は

水の郷

私が生まれ

生まれ

生まれ

死に死に往くは

水の宙

繋がっている

つながって

いたい

繋がっている

つながって

いたい

野菊の花を

手折る

私の足許を

母の死体が流れてゆく

白装束を身に纏まとい

瞑目した母は

威厳を胸に

下しもへ流れる

繋がっている

繋がっている

繋がっている

血潮に染まる

陽に照らされて

私の顔も手も足も

在所ここに溶け入る

智慧の泉より出でて

二手に分かれ

右流は〈受容〉

黒の水

左流は〈表出〉

白の水

交点でまじわれど濁らず

ふたたび分かれて

胎内を経巡る

私の涙は

五十年百年二千年

往古まえに

森の褥しとねを濡らした霧雨の

川面に出でて

私の想いと一つになったもの

繋がっている

という

私の囁きを

あなたは

耳元で

聞く？





その七

水路（二）

昨日のことでした。下調べを終えて児童公園で一休みしていると——そこは大川を臨む河岸段丘の縁へりに造られた小さな公園で、ペンキのはげたシーソーやブランコの遊具が片隅に置かれ、後は何もない場所でした。ひねこびた桜の老木が周囲をかこむように植わっています。私は疲れた足を引きずって鉄柵の間から入ると、どこか腰をおろせないかしらと見回して、道路脇の石碑が目に入りました。桜の葉陰が涼やかな雰囲気をつくっています。私は入り口近くの水飲み場の蛇口を回して生ぬるい水で手を洗い、コンビニで買ったミネラルウォーターを小脇いしごみに碑に向かいました。

見上げると苔むした碑面には「忠魂碑」の文字、台座には落ち葉が散らばり、蟻がはつています。私は碑を背に石段に腰を下ろすと、ペットボトルの栓を思いっきり開けて喉に流しこみました。目をつぶる、私の目蓋に光と影が交錯し、乾いた大地に一条の水が筋をつくって流れていきます。気持ちいい！、また汗になつて噴き出してきても、いいか。

子ども達、目を輝かせて聞くだろうなあ。蚕と水路の歴史。総合学習。みんな、学校の近くを流れている用水路、何のために引かれたか知ってる？当番で掃除してくれてるでしょ。あの水路はもともと、蚕のえさの桑の木に水をやるために造られたんですよ。昔々、このあたりは大川がすぐそばを流れているのに台地で水がなくて、作物がとれなかったんですって。そこで江戸時代に、豪農の——ごうのうってというのは、お金持ちのお百姓さん

のこと——木左右衛門兄弟が幕府に願ひ出て、大川のずっと上流から水を引いてきて荒野を桑畑に変えたんです。その支流が、学校のそばを流れているっていう訳。

先生、畑なんか、どこにもないよ。

そうね、健太くん、今はもう畑は見あたらないけど、よく歩いて見てごらん。桑の木がまだ残っているわよ。日吉神社の境内に一本、公園の脇の藪に二、三本、交番の裏のお家の庭にもあつたわ。先生、自分の目で確かめてきたの。学校の行き帰りとか掃除の時間によろしく目を広げて見てごらん。探そうと思えば、まだいくらでもみつかりそうよ。

へーえ。

さてと、蚕は桑の葉を食べて何を出すでしょう？ウンチ——こら。糸——そうですね。生糸っていうの。ほら（ここで玉手箱よろしく繭玉を取り出す）蚕は幼虫からサナギになる時に、口から糸を吐き出して繭を作ります。その糸をより集めて、人間は絹にして服を織るのです。じゃくん、実は今日先生が着ているブラウスも、シルク、絹なのよ。さあ、今から順番に回しますからね。見せて、見せてと身を乗り出す子ども達……。

二年前の私には考えられなかった。自分が先生になって、教壇に立つなんて……。同じ道を、会社のPR用のパンフを入れた重い紙袋を下げて、フーフーいいながらハイヒールでよろけていた。大卒で入った証券会社、総合職。仕事に慣れてきたと思つたのも束の

間、経営陣の不祥事と金融危機が重なって急速に業績が傾き、私達本社的女性も営業に回された。会社再建の「お約束」と題された新社長の顔写真入りの仰々しいチラシを、支店のある地域を重点的に明細地図にマークされた家を一軒一軒飛び込みで、配って回った。夏の暑い日、汗と埃にまみれて、私たちは不平タラタラだった。でもその不満は会社の口ツカールームや、終社後のビヤホールで渦巻いては消え……一人抜け二人辞め、いつしか同期は私独りだけになっていた。始めから、それが上の人達のネライだったのかもしれない。大きな流れでいえば会社がインターネット証券に特化して生き残りをかける、その過程で私たちは使い捨てられちゃったのよね。

今さら同業他社に移れないし、結婚——進路変更もシャクだし相手もないし、いっそスキルアップに語学留学でもしようかしら……。

手にくいこむ紙袋を道端に置いて、手の平のひものあとをしげしげと見つめていた時、向こうから小学生の一団がやってきた。私服姿で——でも中学生くらいの子もいるわ。画板を小脇にはさんで、手に手に絵の具箱らしきものを提げている。友だち同士肩を組んだり、連れ立って楽しそうにおしゃべりしている十数人の一団。その輪の中に、女性があった。先生？かしら。母と同年輩の、おかつぱ頭がかわいい人。私と目が合って、会釈された。川中島のように立ちつくす私の周囲まわりを、子ども達の穏やかな気配が淀みなく流れ

て行く……。後に取り残されたわたし。遠ざかる歓声……。私は紙袋を放りだして——つていうのはうそだけれど、気持ち的にはドブに捨てたいくらいだった——後を追っていた。学校？にしては人数が少ないし、塾？の時間でもないし、それとも何かのフリースクール、とか？

私の予感はあたっていった。住宅街の何の変哲もない二階建ての民家。その玄関前に立って声をかけようかどうか迷っている私を、最後の子どもが家に入るのを待ってドアを閉めにやってきた先生（？）は、「見学ですか」と一言きいただけで私を招き入れてくれたのだった。それが裕子先生との出会いだった。いかにもという紺の制服を着た私は、「失礼します」と言つて中に入り、子ども達の乱雑に靴が脱ぎ捨てられた玄関で黒い靴をそろえてから、奥の部屋にせずと踏み入った。六畳間を二間つなげた「教室」では、子ども達が思い思いに——ある子はスケッチブックの花の絵を図鑑と見較べたり、ある子は鉛筆をなめなめ作文用紙に向かつていたり、色紙をはさみで切つて花の切り絵づくりにとりかかっている小さな女の子もいた。まるで、江戸時代の、寺子屋みたいだな、というのが私の第一印象だった。畳に置かれた長机の間を、先生がまわつて一人一人助言していた。私は部屋の隅でしゃちほこばつて座りながら——そんな私を子ども達は見学者慣れしているのか一向に意に介さず——でも自然と笑みがこぼれて、見つめていた。こんな仕事も、ありなんだ……

昼休み、子ども達が思い思いにお弁当をひろげている和室と隣り合わせの台所で、テーブルに向き合つて座つた裕子先生は、熱心に私の話を聞いてくれた。上気していた私は、何をしゃべつたか、よく覚えていない。そもそもフリースクールがどんなものか知らなかつたし……。「しばらく研修生で来てみたら。本当にヤル気だつたら、大学の通信教育で教員免許を取り直してみるのも、どう？今日は来てないけど、そういう人も、います」

それが裕子先生の結論というか、アドバイス助言だつた。私は黙つてうなずいた。それから裕子先生は、手短かに私塾を始めたいきさつを話してくれた。二十年、三十年と教師をやつてきて、最近はとみに指の間から水がもれるように学校に來れなくなつてしまふ子ども達のこと、気がなつて——もう教育技術とかそういう問題じゃないのね。一教師の力でどうにかなるものでもないけど、それでも自分にできること、自分にしかできないことがあるんじゃないかと思ひ悩んで、思い切つて恩給が出る歳になつて辞めたのよ。本当に少人数のアットホームな場で、どの子もかけがえのない、自分の理想の教育をめざそうと……。

不登校、と言われても正直、ピンと來なかつた。私の周囲にはそんな子はいなかつたし……隣の部屋で屈託なくくつろいでいる子ども達の表情にも、学校に來れない↓いじけて暗い、陰惨悲惨、という私のイメージを裏切る、崩す顔つきばかりだつた。建物つていうか経済的にはとっても恵まれてないようだけれど（後で聞いた話では、裕子先生が私財を注

ぎ込んで——どうやら退職金で、学校の運営費を賄っているらしかった。生徒からそんなに高い授業料はとれないし、後はみんなボランティア。親ごさんとか私みたいな、磁石に吸い寄せられた若者たち、毎日子どもの笑顔に囲まれて、しかも尊敬できる人生の先輩が身近に居る・・・私の居場所は、ここだ！そうに違いない。これも何かの縁。決めた。

帰り道、高揚した気持ちで坂を下っていったら、電信柱の陰に私の紙袋が置いてあるのが目に入った。私が置き忘れたの？忘れちゃった。その時初めて、親の顔が浮かんだ。どうにでもなるわよ、ね。どうにでもなった。転職に、親は全く口をはさまなかった。新聞紙上で、毎日のように不安説が報道されていたから、かえって安心したのでしょうか。アルバイトしながら大学に通うことにも、それほど異を唱えなかった。

「専門学校で、何か一つでも資格をとっておいた方が、この時期、つぶしがきくんじゃないか」

結論が変わるのをハナから期待していない、ただ自分の気持ちをなだめるためだけなの  
が自分でもよく分かっている口振りで父親はものを言い、その傍らで母——何十年も専業  
主婦の座に安住して夫を裏から操ることに執心してきた、私の反面教師——が、こっくり  
頷くのを、私は何だか許せる気持ちで見っていた。この人にはこの人の、人生があつたんだ  
ろうなあ。でも私は、自分で切り拓きたい——。

「水は、飲みますか」

え!?と思つて、私は目を開けました。一瞬、夏の光に射られて白くなった世界に、あぶり絵のように老人が浮かび上がってきました。私の右斜め前、台座を囲む石段に、その人は腰掛けていたのです。

「人生は、匂いです」

私は急にペットボトルを左手に持ったままものを意識して、とりつくろうようにフタを探し、栓を回しました。昼下がりの公園には、誰もいない。このお年寄りには、私に声をかけているんだろうか——私にかけている。もしかして、頭がおかしいんじゃないかしら。痴呆症とかの……。

「支那<sup>シナ</sup>で戦つてた時のことです。ある晩設営して、夕飯になった。味噌汁がどうも臭い。イヤな臭いがする。クリークから水を汲んで煮炊きに使つてたんですが、炊事兵に調べて来いと言つと、何でもないと言う。そのうち、髪の毛が出てきた。もう一度、見に行かせると、上流で、チャンコロが死んでたんです」

老人は、目を細めて、孫に昔話を聞かせるような穏やかな表情で語り続けました。私は、チャンコロ〓中国、人?という図式が、頭の中でグルグル回っていました。老人は、抑揚のない声で歌を詠みました。



血に塗れ井戸側による老婆ひとり据えし眼に氷の憎みあり

古兵らは深傷の老婆をやたら撃ちなお足らぬげに井戸に投げ入る

老人の、パジャマ代わりなのかヨレヨレの灰色のTシャツの背と、白髪に、私の目はくぎづけになりました。

「わたしは撃つた、わたしは撃たない。わたしは撃つた、わたしは撃たない。わたしは撃つた、わたしは撃たない……」

いつの間にか蝉しぐれがピタッと止んで、ものうい雰囲気漂う公園の中で、老人はエンドレステープのように呟きつづけました。私は、恐怖感ともなんともつかない感情に襲われて、衝動的に立ち上がりました。

「あら、おじいちゃん、こんな所に」

女性の声がかして顔を上げると、気づかぬうちに公園の入り口に横付けしていた白いワゴン車から中年の女性が下りて歩いて来るのが見え、私の方に「どうも、すみません」というふうになんか会釈し、老人に歩み寄りました。老人の顔は能面の表情に一変し、「もう遅い」と一言つぶやくと、機械仕掛けの人形のように立ち上がって、片手を差し出しました。婦人は老人に手を添え、車までエスコートし、やがて二人の乗った車は走り去りました。

私は、白いサマードレスとグレーのスエットの影がいつまでも網膜に焼きついて消えなかったのですが、混乱した意識のまま、足は自ずと出入り口とは反対側の崖の方に向かっていました。覆い被さるような桜の葉群はむれの向こうに、蛇行して流れる大川の水面が白く光り、どこまでも続く街並みが見えます。蝉しぐれと雑木の群がり、崖を流れ下っていました。下水処理場まで歩かなければ・・・水路は、あそこまで続く・・・。

私のほおを、髪がなでました。

その八

濁流

昨夜来の雨も上がって、川の流れは一時ほどの激しさを失せている。それでも黒い濁流が、暗く情念深く、あくまで静寂をたたえて、流れ下って行く。

それは橋から投影されたサーチライトの輪に瞬間的に浮き上がり、刻一刻と面貌を変え、いつまで見ても見飽きない。レインコートを着た警官と消防団員が、欄干の所に寄り集まったり、餌を求めて周廻する虫たちのように赤い回転灯を戴いている車両の周囲を歩き回っている。非常水位よりは下がったようだが、まだ警戒範囲を超えている。上流に降った雨がここまで達する間の、時間差もあるだろう。あの人達、夜通し警戒にあたるのかしら。ごくろうさま。

「ほお、見ろよ。ドラム缶だ。ドラム缶が流れてくるぞ」

夫が身を乗り出すようにして声を挙げた。水面の光の輪の中に、それらしきユーモアのある物体がプカプカと現れて消え、橋の上の人間たちが欄干に駆け寄り——橋脚への衝突・損傷を恐れたか——また反対側に一斉に移動するのを、妻は、遠い水面の反射光が頬に反映して思わず肉がゆるんだか、ほほえむように応えた。

「そうね、ガソリンスタンドから流されてきたのかしら」

また、言っちゃった。分かりきったこと。お菓子屋さんにドラム缶が並べてあるとでも言うの。おバカさん。

手元の皿に、カシューナッツとブルーチーズ、それに別の小皿には酢昆布を小さくカットしたものを盛ってある。グラスを持つ手を傾ける。赤い液体が平衡をとる。二人の間に置かれたワインボトル。栓がかしいでいる。奥には衝立のように、舞台の大道具の背景画のように、リビングのガラス窓が横に大きく拡がっている。ここからの眺望ながめが入って、このオートロック・マンションを買った。三十代。ローンは完済。夫が特注でバーにあるような細長いカウンターテーブルと、これまたバーに据え付けの丸椅子を家具屋に造らせた。エレベーターに乗せるときは係りの人が苦勞したけど——「そこまでは寸法を測ってなかったよ！」と後で、夫がテーブルに片肘をつきワインを傾けながら、手柄話のように語った。それから毎週金曜日、夫とこややつて夜三昧をするのが慣わしになった。二人並んで、夜景を見る。ポツリ、ポツリと、狐の嫁入りのような会話を、時折り交わす。BG MにFMでクラシックを聴きとれるかとれないかの音量で流して。

「今、泣かなかった？」

一呼吸、いや二呼吸置いて夫が応える。

「うん？」

この間の悪さが、気にくわない。

「美果ミカ」

「オレには聞こえなかったよ」

「見てきてくれない」

「ああ」

のろい動作が不承不承を示しながら、それでも言葉では拒まずに、夫が寝室をのぞきに行く。チグハグ、チグハグ。チグハグ、チグハグ。二歳の娘が、お人形さんに囲まれて、寝息を立てている。布団をはいでたら、掛け直してね。お父さん。

夢を見る

オリジナル  
一人唄。  
いつしかバスタブの中で、鼻声で歌っていた。誰も知らない、誰のでもない歌。私だけの、

ゆめをーみる

ゆめをみる

ゆめをーみる

ゆめ、ゆめをみる

ゆめをーみる

あ、あ、あ、あ、あ、あ

ゆめをーみる

あ、あ

ゆめをみる

ゆめをーみる

ゆめ、ゆめをみる

ああ、ゆーめを

ゆめ、ゆめ、ゆめ、ゆめ、ゆめ

ゆめをーみる

ああ、ゆめをみる

ゆめをーみる

ゆめ、ゆめをみる

らら、らーらら

らら、ゆめをみよ

らら、らーらら

ゆめ、ゆめをみよ

ゆめをーみよ

ら、ら、ゆめをみよ

ゆめをーみよ

ゆめ、ゆめをみよ

ん、ん、んーん

んんんん

んんんーん

んん、んんんん

んん、んーん

ゆめ、ゆめをみよ

おお、おーお、お

おお、おおおお

おお、おーおお

ゆめ、ゆめをみよ・・・

いつしか湯気の中に歌声が消えると、体も満ち足りて風呂から上がる。今日も、これから――



「どうだった？」

「寝てたよ。ぐっすり」

「そう」

起きることはないもんね。ずっと寝たまま、夜は。昼は目を開けつづけている。二人で演じるロールプレイ。わたしは妻であり母、あなたは夫であって父。

「あの橋の許たもとにね」

「ん？」

止まり木にノロノロと座り直そうとしていた夫に声を掛ける。

「ホームレスの人が住んでるのよ」

「へーえ」

夫が気のない返事をする。

「この雨で、どうしちゃったのかしら。まさか流れでも――」

「そんなことはないだろう」

夫が冷笑気味さへぎに遮る。

「あの人たちは、そら、ネズミが難破船から逃げるっていうじゃないか。動物的感覚に優れているかもしれないよ。案外、ラジオやケータイとか、現代的な機器で武装してたり

してね」

それならいいけど……。美果を見て、笑ったのよ、あのおじさん。人なつつこい笑顔だった。美果が火をつけたようになきだしちゃったから、堤防の上からころげるように走り降りて行った……。悪いことをしたわ。誰かに見られてるような気がしたから、気まずく感じて私が手元のスイッチを押しちゃったの。ゴメンナサイね。でも、あのおじさんのあわてっぷりったら、フフフ……。

「そろそろ、どうだい」

夫がワインのコルクをギョツ、ギョツと詰め直す。それがいつもの合図<sup>シグナル</sup>。私はお風呂に入って体を流し、この人は書齋でホームページの更新をする。「ダンディ・カマクラの育児日記」。一番アクセスがあったのは、美果が湯船でウンチをもらした時のこと。私も、我が家でも——お仕置きはどうする？食事の問題でしょ。インターネットでけんけんがくがく。よくそこまで本気になれるのね。感心しちゃうわ。

フロアリングの床からバスルームのマットへ。この頃、便秘ぎみなの。冷えからくるらしいわ。お風呂で体をぬくめて——でも、どうしてかしら。好きな人と一緒にいるのに？……。

ゆめをみる

いつまで続くの、このゲーム。

ゆめ、ゆめをみる

脱衣カゴにブラジャーを落とす。乳房を両の手で包む。赤ちゃんにしゃぶられたことのない私のオッパイ。夫が嘔んでくると乳首は立つけど、わたしの中の私はいつもわたしを見ている。

ん  
ん  
ん  
ん  
ん  
ん  
ん  
ん

週一。ワインの臭い。覆いかぶさる肉体。できる、できない。できる、できない。

ら  
ら  
ら  
ら

ら  
ら  
ら

「ホームページが見つかりません」——美果の育児日記が終わるのは、いつかしら？  
そもそも、おまえは、子どもを、望んで、い・る・の・か・い？

ら  
ら

わかんない

その九

塹壕ざんごうを出でてサバイバルウォー白兵戦に備えよ

中隊長指令第19…本日19時に隊員各自は報告書を持って基地に集合のこと。(別ウインドウ、オープン。白軍兵士の秘密基地。第二次世界大戦で日本軍が使用した塹壕の跡。防空壕として使われたが荒れ果てていたのを、兵士達の献身的な努力で秘密司令部に生まれ変わった。映像…並列的に)

【解説】

現代都市戦の定石として、司令部はさりげない場所に置かれなければならない。例えばスーパールの2Fの事務所やレンタル機器会社の倉庫など。我々の秘密基地はその点、最上の地点に位置している。市民が散策にいそむ川沿いの遊歩道——そのコンクリート柵を一步はずれると、河岸段丘の崖に向かって藪が広がっている。この境界線を越える時は、兵士諸君は、飼い犬にフンをさせる仕草で、あるいは人の流れが切れるのを待つてキャッチボールのボールを拾いに行く身振りで、さりげなく異界に潜り込まなければならない。兵士心得…戦士は後を振り返らない。

所々粗大ゴミが捨てられた雑木の中は、意外に明るい。そこまで来て初めて、周囲を警戒すること。サイクリングロードからこちらを訝しげに見ている人間はいないか？ OK。第2段階に進もう。不幸にもこの地点で敵方との遮断に失敗すれば、君は命を落とすことになる。名誉の戦死である。重々承知のこととは思おう。

さて、崖の下まで来ると、大きな藪樁の木が繁っている。冬には蜜を求めてメジロが集うこの木の根本に、山芋掘りの穴を擬装カムフラージュして、我々の部屋への入り口がある。ここではそれほど神経を使うことはない。なぜなら、人は山芋掘りの跡だと視認アイキョウしてしまえば、それ以上の推測が働かないものなのだから。君は、コンクリートの蓋を開け、木の根っこや枯れ葉をそれらしく元に戻して、身を潜り込ませればよい。良く来たな。全員揃った。それでは、始めることにしよう。

中隊長…オウル。

全員…オウル。

(注解…これは我々、梟師団フクロウの部隊名である)

天井、壁、床ともコンクリが打ちっ放しになった室内は、滲み出る湿気とカビの臭気に満たされている。アウトドア用の折り畳みテーブルの上に置かれたろうそくが一本。この灯っている時間が、会議の時間と定められている。迅速に、かつ的確に。出入り口の隙間から、一条の淡い光が射している。それは中隊長の顔からテーブルに置かれた手にかけて、切り傷のように――あるいは、記憶の、破られた写真の裂け目のように、斜めに裁断カッティングしている。

中隊長…まず情勢分析から始めよう。カルロス。

副官カルロス…ハッ。特に顕著な変化は認められません。黒軍エネミーは、川向こうに布陣し、我々

の動向を窺っているものと推測されます。近々増派して大規模な攻撃を仕かけてくる予兆はなく、定期的に情報収集活動を行っていると思われる。

中隊長…して、我らの戦果は、如何に？

下士官A…ハッ。此岸に渡河した偵察要員と思われる黒軍兵士を一人、捕獲して泳がせています。早朝、軽車両で移動しながら、廃棄された物品から我が方の民度を推し量り、民心の動向把握に努めているものと推測されます。

中隊長…泳がせたままで大丈夫か？そのメリットは？

下士官A…ハッ。いつでも殲滅可能ですが、視点の獲得に於いて、有効であろうかと存じます。

下士官B…ハッ。補足説明をさせていただきます。我が方の基軸のブレ、並びに敵方との間及び角度の微調整は、これは机上ではなしえぬことではないかと考えます。付け加えれば――

中隊長…もう良い。司令官のような口を利くな。ハッ、ハッ、ハ。逆にデメリットはどうか？

(皆、顔を見合わせた後)

副官カルロス…ハッ。あると言えば民心に与える不安でしょうが、殆どないと言っても過



言ではないかと存じます。奴は、日常生活の風景に溶け込んでおります。氏素性を知って内通者が現れれば話は別ですが、澄み渡った空をよぎる一片の雲を、誰が気にとめましようか。

中隊長…いいや、雲は、つか掴め。

一同…ハツ。

中隊長…雲は掴まなければ、味は分からぬ。そうではないか。

一同…はあ。

中隊長…(憂いを帯びた口調で) 我々と黒軍エネミーは共通の土俵に乗っている。この二者は対立しつつ共存してるとも言えるのだ。なぜなら敵が存在しなければ我々の存在理由レゾンデートルもなくなってしまうのだから。ここに、戦闘者集団固有の困難があり、喜びや悲しみもまた存在する。分かるかな、おまえたちに…。(中隊長はゆっくりと視線を移す。テーブルに置かれた両手から、一条の光を追うように出入り口の扉の方へ。そこでテレビカメラと目が合う。両者、しばし見詰め合う。ややあつて)

中隊長…汝の敵を愛せ。これは宗教者がもてあそぶような言説パロールでは断じてなく、戦いの現場バトルフィールドで生死に己が身を曝している者こそが発するのを許される聖言マントラなのだ。もう一度言う。敵を愛せ。愛するが故に、一撃の下に倒して苦痛を与えるな。僥倖カウティングとも言えることの透明な一瞬が訪れた時、死は苦しみではなく、彼岸ゼアへの渡し船ジャンピングボードとなろう。敵の旅立ち

を祝おうではないか。残された死体を見て、諸君の口の中には苦々しいもの、甘酸っぱいもの、何とも形容しがたいものが生まれているかもしれない。それこそが人生なのだ。良く味わい給え。覆い隠された欺瞞を暴き、真実に目覚めさせる——これが我が梟師団の使命である。オウル！

全員…オウル！

中隊長…指令を下す。今この停滞を破るために、我々は死を欲している。勿論、おまえたちが死ぬことはない。戦時下であるという大状況と、黒軍が対岸に布陣している小状況にあつて、民草が弛緩に陥らないためには、常に一定の拍子が日常に必要とされる。死こそ、血にまみれた死体こそ、最強の鼓動となろう。目覚めよ、惰眠を貪る者よ。起て、戦士達、柏手！

(洞穴の中に、手を打つ音が響き渡る。別ウインドウ、オープン。CGで描かれたミニスカ姿の少女がにこやかにポーズをとって浮かび上がる)

中隊長…さくらさなえ様。我らを見護り給え、導き給え、力を与え給え。出撃！

その十

打出うちでの  
小槌こづち

## さても昨日きのう

男の至福の時。朝の一仕事を終えて、コーヒーを入れる。カセットコンロに片手鍋をのせ、毎度ごくろうさん、一杯分の水を計量カップで計って注ぐ。ペットボトルの水は、あと一日半は大丈夫、と。外に出て、伸びをする。今日もお天道テントさん、気前がいいや。うれしいねえ。かあちゃん、洗濯日びより和だよ。お勤め、ご苦労さん。体は川に向けたまま、首だけ捻って斜め上を見る。男の目の先には自転車道路。出勤時間の遅いサラリーマンや遅刻を取り戻そうと必死にペダルを漕ぐ高校生が走って行く。男はニツタリと顎ひげをなでる。おー、潮が引くぞおー。腹の底から、海に向かって叫びたい。叫びてえよ、オレだつて。でもなあ。ポン、ポンと拳で交互に肩をたたく。礫つぶてが、飛んでこなくなった、それだけでも、ありがてえじゃねえか。ほい、兄あにさん、つぶて、つぶて、石のつぶて、何を払う。すずめをはらう。米くうな。からすをはらう。ゴミちらかすな。つぶて、つぶて、めんたまつぶて、何を払う。男をはらう。女をはらう。子どもをはらう。消えちまえ。

おつとつと。男はビニールテントにもぐりこむ。また、やっちまったよ。カセットコンロのスイッチをあわてて立てる。あつちつちつち！鍋の握り手が熱くなっていた。無意識に耳たぶに手をやる。どじな自分、しよぼくれて、よぼよぼで、物忘れがはげしくて、すっかり涙もろくなつてしまった五十男の自分が、いとおいしい。肩を抱きそうになる。

ハッ！

コーヒーカップを手を外に出る。通勤通学客の波が引き、静まりかえった河川敷。ブア〜ンと、どこかで建築現場の電動ノコの音がする。間延びした時間、このアイドリリング状態が男は好きだ。一日に一度、この時間帯だけ、男はサイクリングロードに登って川を見やる。

朝礼で訓示を終え、社長室に戻る。ソファアにどかつと腰をおろし業界紙をペラペラとめくっていると、女子社員がお茶を運んでくる。あの頃は、緑茶だった。湯飲みを手に新聞記事を目で追いながら、頭では一日の段取りを組み立てている。あの男に会って、店舗を回って、夜は会合、と。職人は午前と午後の休憩時間に砂糖のどつぷりと入った缶コーヒーを決まって飲む、と今の仕事に就いてから先輩に教えられた。現場を回ってもアルミ缶は少ないぜ。何しろ肉体系は燃料補給だからな。オフィスの知的ワーカーは砂糖を控えて、ブラック。間をとって、オレは軽労働のカフェオーレ。この商売、三日やったら辞められねえぞ。何しろ時間は、たっぷりあるもんな。

男はコーヒーを片手に、ちびりちびり、半時間はねばる。あまり遅くなると散歩の人と出くわしてしまう。伸び放題の髪、薄汚れた作業着とズック靴、背を丸め目をそばめて遠くを見ている姿は、お地藏さん。お地藏さん。

## さて昨日

えっ、そうだよね、いけなかつたんだよね。ごめんね。おじさんが、いけんかった。いけんことをした。キャンディーを手で渡そうなんて、だいそれたことを……。乳母車から下りた女の子が半ベソをかいている。目に涙をためて、指をかんで。女の子が振り返る乳母車の後ろに立つ母親は、無言の笑顔の下に激しい拒絶の意思をこめて手が車のバーを握りしめている。バカヤロー！何てことを、おめえはしたんだ。男はこのまま身をまるめて、河原の土手を転げ落ちていきたい衝動にかられる。照れ隠しの薄笑い、青草の汁と草いきれでぐじゃぐじゃの涙顔に変わるだろう。

どうすりゃあ、よかつたんだ？キャンディーの小袋を、袋から取り出さないうで大袋のままスーパールのビニール袋で包んで——白い袋、清潔だろ？——身をかがめて、犬のようにはいつくばって手を差し出せば、受け取ってくれたとでも言うんかい？汚い、ばっちい、臭い、そりゃあオレだ、キャンディーじゃねえよ。

男は、今朝は気持ち良かった。商店街のはずれでいつものように不燃ゴミの仕分けをしていると、割烹着をきたどこぞやらの仕出し屋の女将おかみさんらしき女ひとが、手伝ってくれたのだ。オレはうれしかったねえ。「ごくろうさん」とその気がないのに声をかけられるより、千円札を握らされるより、よっぽど嬉しかったぜ。六十、七十、とにかくオレよりよっ

ぼど年をくつてるのに、背筋をシャンと伸ばしてしゃがんだまま、黙って、白い細い手で、缶を選びわけてくれたんだぜ。オレは、もらい泣きしそうになつたぜ。嬉しかったねえ。オレの商売は、ものもらいじゃござんせん。社会にれつきと貢献している、エコなええお仕事でござります。オレは自転車の荷台に空き缶のつまった大ゴミ袋を拾ってきた自転車のチューブで紐代わりにしつかり結わえつけると、口笛を吹きながらそこを後にしたんだが、内心はビクビクもんだつたぜ。何しろ、袋が満杯だったもんで、ここでザザツと崩れちゃ、あの婆さんに面目立たねえなあ、つて。

二杯飲んじまった。欲張つたのが、いけんかった。一杯で止めときゃあ、あの母子おやこ連れに、出くわすこともなかつただろうに……。

男はすぐごと土手を下りると、負け犬よろしく青テントに潜り込む。「知らない人から食べものもらっちゃいけないって、あれほど言つてるでしょ!」「……、うえ〜ん」——母親の叱責に、女の子が身をもつてあがらつている光景を期待して、男は巣穴からのぞく小動物のようにテントの端から堤防をうかがつたが、青い背景を斜めに裁ち切る直線上には人影はなく、親子は足早に立ち去つたものようだった。男は落胆して、コーヒークップを落としそうになる。ふと何かの気配がして、コンロの脇、アクリルの衣装ケース——その中には、宝物入れとして使っている救急箱に、独りで遊ぶオセロや詰め将棋盤と

並んで、思い出を記憶から限りなく引き出す家族の写真と会社案内のリーフレットが隠してあった——の上に、置物のように鎮座していた黒猫と目が合った。

「このヤロー、出てけー！」

男がコーヒーカップを振り上げると、猫は悠然とかつ敏捷に男の脇をすり抜けて、テントの入り口から出ていった。男は、タメ息をついた。

### さても昨日

むかし、むかし、男がおつたとき。橋の下に一人で住んで、名を清兵衛せいべえと言ったそうなの。この男、人は良かったが貧しくて、毎日毎日ひもじい思いをしてた。

ある日、清兵衛が小便をひっかけに川に出てみると、向こうから見慣れぬものがプカリ、プカリと流れてきたそうなの。拾い物にかけては天下一品、清兵衛は着物の裾をはしよるとザブザブと川に足を踏入れた。手に取ってみると、それはそれは立派な小槌、天子様でも使うような代物しろものじゃ。清兵衛はうれしいやら誇らしいやら、岸に戻ると、村の者に見せびらかすように小槌を振ったそうなの。すると、アレ、不思議、小槌はカラン、コロンと音がすると思いきや、「おまえの願いを三つかなえてあげよう」とどこからともなく声がした。



清兵衛はびっくり仰天、腰を抜かすほど驚いたが、周りを見回しても誰もおらん。広い河原に、聞こえるのは川音ばかりじゃ。ははくん、おれっち、狸たぬきに化かされたかや。それならこつちも、からかつてやんべえ。清兵衛はにやつとすると、川向ここの古狸が棲むという権現山に向かつて

「そば、食いてえ」

と、叫んだそうな。ちょうど昼時で、その日も食う物がなくて腹をすかせていたんだと。すると、あら不思議、「そば、食いてえ」という声が川風に消されぬうちに、清兵衛の目の前に、ドーンと盛りそば一丁が現れたと。これには清兵衛もおったまげた。夢か幻か、ほつぺたをつねったが、「いてて」。おそろおそろ手を伸ばしてみると、挽ひきたて、打ちたて、茹ゆでたての三たてのそばが、冷水に冷やされてきりりと指に触れた。清兵衛はたまらなくなつて、箸でむしゃばるようにならげた。うまいのなんのつて。

ふう〜。

そばを平らげってから、清兵衛は不安になった。もし小槌の願い事が本当なら、オレはもう一つを使つちまつたことになる。清兵衛は辺りを見回した。幸い誰もおらぬ。清兵衛は胸にしまい込むように小袖の合わせ目に小槌を隠すと

「まず、ゼニ錢だ、ゼニ錢だ」

と、小声で言つて小槌を振つた。

どーんと、目の前で火の玉が炸裂したように光ると、清兵衛はまばゆいばかりの小判に囲まれていた。黄金こがねの井戸に落ち込んだように、清兵衛の頭まで小判がぐるりと囲んでおる。

「まるで、あり地獄じゃな」

あまりの金貨の多さに土肝を抜かれて、清兵衛は一人ごちた。頭の上に、ポツカリと青空がのぞいておる。そばの時のように、肚ハラから声を出せば、こんなことにもならなかつたか・・。

ええ、ままよ。この銭を、どうしてくれよう。清兵衛は河原の石の上にあぐらをかいた。何とか村のやつらに見つからぬうちに、隠カクレさにやららん。

それから清兵衛は、考えに考えた。願ネガい事はあと一つしか残つておらん。最後の一回は振らずにとつておいて、持てるだけの金貨を持つて後は野となれ山となれ、知らぬが仏でとんずらを決め込む手も考えたが、それでは小槌の効力が消えてしまうようで、不安で不安でしようがなかつた。この場で使い切つちまつた方が、せいせいすらあ。

では、どうする？いつまでも放つておく訳にはいくめえ。陽が西に傾けば、百姓どもが田んぼから鍬をかついで土手の上を引き上げて来るだろう。欲ホシの深いあいつらに見つかつたら最後、何をされるか分かりやあしねえ。オレの取り分など知つたもんかと、我先に金を盗みとつちまうだろう。さあ、清兵衛、どうする。ここは、考えどころだぞ。

まず、太閤様も足元に及ばぬ立派な天守閣の城を考えた。難攻不落の千早城。幾千の敵ものともせん。一騎当千の武士が守る。ん？誰が守る？城とお侍じゃあ、二回になっちまう。ここは、城はあきらめて、騎馬武者にするべえ。どんな強者つわものも一撃の下に切り落とす。劍の使い手、右に並ぶ者なし。こいつあ腕も立つが、飯もたらふく食うにちげえねえ。ま、そいつは蓄えを切り崩すとして・・・清兵衛は、急に不安に襲われた。もしこのお侍がご主人様に反抗したら？つまり、オレにだ、敵は本能寺とばかり刃を向けたら、オレはひとたまりもあるめえ・・・

ゲラゲラゲラ

笑い声で清兵衛は我に返った。確かに人の声がする。清兵衛はつま先だつて外をのぞいたと。見ると、いつの間に来たか、土手の上を村の衆しが鈴なりになつてたそう。清兵衛はすんでのところで卒倒しそうになるのをこらえた。

「おーい、ぬしはそこで何しちよる？」

あれは、村長むらおさの呑兵衛どんべえだ。何をぬかしやがる。もうろくじじいめ。見れば、分かるじやろが。この小判が見えぬか、という言葉ことばを清兵衛は飲み込んだ。

「野ぐそか」

見物人からどつと笑い声が起こった。清兵衛はかつとなった。だいたいこの男は気が短

くてな、それで人生失敗したようなもんだ。嫁はんにも愛想つかされた。日頃の村の衆の仕打ちに耐えかねていた清兵衛は、この時とばかり怒鳴り返した。

「ああ、野グソも野グソ、立派な糞神さまよ。金に光つとる。おまるに入れて、おまえさまがたに見せてやりてえぐらいだ」

だがこの時にな、清兵衛の頭の片隅には、なんで村人は先を争うように銭を拾いにこないのか、悠長に祭見物などしておるのか？という疑問が浮かんだそうなの。

あつ、しもうた

と、清兵衛が後悔したのも束の間、ドーンと辺りが光り輝くと、川の上にそれはそれは大きな金色のおまるが浮かんで、清兵衛は打出の小槌を手にも黄金の小判の上に恍惚となつてまたがり、おまるは西方浄土、夕陽に染まってゆらりゆらり、海の方に流れていったと。その後村人たちは橋のたもとに祠をもうけ、清兵衛神社と奉つて、手厚く祀つたそうなの。橋を渡る子どもらのお囃子が、ほれ、聞こえるやろ。

トントントンカラリ

トンカラリ

トントントンカラリ

トンカラリ

せいべえの

またぎごえ

トントントンカラリ

トンカラリ

いちふんで

にいふむな

さんふんで

よんふむな

せいべえの  
またこすり

トントンカラリ

トンカラリ

いつまでも、いつまでも、子どもらの唱和する声が村の中に絶えなかつたと。

### さても昨日

男の昼は、午睡ひるねで始まる。万年床の上に仰向けになつて目を閉じる。寝入るのではない。まどろむのだ。この時間は、男にとって人生の復習の時である。十年前、二十年前、三十年前……の自分は、今日、何をしていた？……男はついで日記など書いてこなかつたから、手掛かりは何もない。あるのは記憶だけである。頭の中の引き出しを開けたり閉めたりしながら、わずかな記憶の断片を手掛かりにあの頃の自分を再現してゆく。そうすると、何十年も忘却の淵に沈んでいた過去が、昨日のことのようにありありと浮かんでくる

ことがある。男にとって意外だったのは、仕事や公の活動よりも、家族との事が回顧の際の指標になる、という事実の発見だった。それも何気ない日常の、例えば、長男が初めてハイハイをした日、娘の幼稚園での誕生会、息子に自転車を買ってあげて公園で練習したこと、風呂上がり初めて娘を感じた日、「オヤジ」と呼ばれて内心うれしくもありとまどった瞬間……。

これなら一生、独房に入れられても退屈はしまい、と男は思った。何しろ何十年も生きてきたのである。思い出す事柄も、数限りなく眠っていた。目を閉じてまどろみながら、どんなTVドラマよりも面白い自分の過去の再現に、男ははまっていた。それでどうなるものでもない。記憶を蘇らせたとして、明日が変わる訳ではない。単調な日々は、続いてゆくであろう。いつ来るか分からない死の瞬間まで……。男は予定調和の中に生きていた。ガサツ、という音で目が覚めた。少年が立って、自分を見下ろしていた。男は夢か現実か、一瞬、頭が混乱してしまった。中学を卒業して高校に入学した年、バレーボール部の合宿で家から布団をかついで合宿所まで歩いていった過去を、思い出していたのだ。とっさに「出てけ」という言葉が出なかった。少年の表情に、敵意か嘲笑か、他者に対する攻撃性を読みとっていたら、男にも判断が下せたかもしれない。ジーンズにロゴTシャツ、その上からダンガリーをはおった少年は、遠く、長い航海に出帆する船縁に立つ水兵のよ

うなまなざしをしていた。

「おじさん、いつもコーヒー飲んでるだろ。お茶菓子、持ってきたよ」

少年がぶつきらぼうに言う口先に、男はちゃぶ台兼物入れのダンボール箱の上に置かれたバウムクーヘンの包みを見た。音もなく入ってきた少年は、名刺代わりとでもいうように、ビニール袋を放り投げたのだった。

「ありがとう」

男は、自分でも意外な言葉が口をついて出、犬歯が抜けて歯垢で黄色くなつた歯を見せて笑った。一人で土手に腰を下ろしてコーヒーを飲んでいるのを、この子は見ているんだ……何だかそれだけの事が、無性にうれしかった。おまえは何しに来たんだ？という詮索の言葉よりも前に、「コーヒー入れよか」という語句が自然に口からこぼれた。

少年は飲むとも飲まぬとも言わず、室内を見回して、アンテナを立てたままのラジオに目を寄せた。

「おじさん、これ、聞けるの？」

「立派な現役さ。AMだつてFMだつて、TVの野球中継だつて何でもござれだ」

男は片手鍋にペットボトルの水を移し替えながら答えた。カセットコンロのスイッチを入れる時に、手が震えるところを少年に見られたくない、と感じた。



「ふう〜〜ん」

感心したようなしないような、少年は語尾を長く伸ばして応えると、衣装ケースに目を移して手をかけた。

「こん中、何が入ってんだ？」

「それだけは、止めてくれよ」

自分の言葉に哀願の卑屈な響きがするのには男は驚いたが、今朝、仕事場で拾ってきた南金錠を使えるかどうか試しにかけておいたのを思い出して胸をなでおろした。

「エッチな写真だろ？」

少しも卑猥さを感じさせない、子どものイタズラを見つけて面白がっている素振り少年が言った。

「そんなもん、オレは卒業したよ」

そつぎよう？家族旅行は、おじさん、とうの昔に終わりました。おまえよりは人生を知ってんだぞ、という威厳をこめて、男は少年を揶揄した。オレにもこんな歳があった。息子にも、こんな年頃があった・・・。

「ぼうず、ポケットでチャラチャラいわせてんのは何だ？」

男は心に余裕ができたか、先程から気になっていたことを尋ねた。少年は、片手をダン

ガリーの胸ポケットにつっこんだまま、男を「尋問」していたのだ。コーヒーの粉をカップに入れる男の手は震えていなかった。

「アーミーナイフ、護身用さ」

少年は、わざと、ヤクザっぽい表情をつくって、目の前でナイフの刃を立ててみせた。男はイヤな思いが背中を走ったが、努めて受け流した。

「そら、飲みな」

少年は、素直にナイフをしまうと、青シートにしゃがみこんでコーヒーをすすった。

「にがいに！」

「ハハハハ」

少年の子どもっぽいやつ仕草に男は笑い、普段から健康に気をつけて砂糖を置いてないのをちよつぴり後悔した。

「おじさんも、食べなよ」

少年はあわてたように菓子の袋をちぎって中からバウムクーヘンを一つとりだすと、口に放りこんだ。男が自分の方に寄せられた茶菓子の手を伸ばそうとした時、出し抜けに少年が立ち上がった。

「オヤジ狩りに、気をつけなよ」

少年は自分の目の裏を見るようなまなざしでそれだけ言うと、アーミーナイフを放り投げて、音もなくテントからすべり出た。他人の気配の残るビニールシートの囲いの中に、青ざめた男とナイフだけが、残された。



その十一

鉄橋

お母さん、電車はもうすぐ鉄橋を渡ろうとしています。

橋を渡れば東京、東京はアメリカとつながっています。明後日には、ウイスコンシン州の小さな大学街の檜の森を望む学生寮の一室に、私は落ち着いているでしょう。半月前、お父さんと三人で入寮の手続きに来て部屋に通され、お母さんはカーテンを引いて目に入ってきた森の奥の湖をみやって

「静かなところね。冬は、氷が張るの？」

と私にとも誰にともなくたずね、私はうなずいてから

「これは、スチーム式の暖房かい？」

と、ベッドの脇のスチーマーのバルブを開けたり閉めたりしているお父さんのところに行つて使い方を説明してあげ、窓に目をやると、お母さんは窓枠にもたれて目頭を押さえていましたね。少女のように……。初めての海外旅行、飛行機の中ではあんなにはしゃいで引率教師役のお父さんから何度もたしなめられてばかりいたのに。私は、お母さんの肩を抱いてあげた。どちらがこれから留学生活を送るのか、分からない情景でしたね。

また別のシーンが浮かびます。高校入試の合格発表の日。私が玄関で「一人で見てくるから」と邪険にお母さんを突き放して後ろ手でドアを閉め、同級生と息せき切つて校門を抜けて掲示板に駆けより、自分の受験番号を見つけて友だちと手をたたいて喜んでいると、

ふと頭が巡って、受験生を遠巻きに囲んだ熱い人垣の中にお母さんがうれしそうに立っていたのでした。私は自分のはしゃいでいた姿を見られたのが恥ずかしいやら悔しいやら——だって、私が本当に行きたかった学校ではなかったんですもの——複雑な気持ちに突き落とされました。

私が本当にしたい事は何なのかしら？ 私は、お母さんの望むように、お母さんの喜ぶ顔が見たくて、生きてきたんじゃないかしら……。思えばあの日から、得体の知れない重苦しい不安が私に取り憑いたように思います。その後の大学受験、就職、結婚と、一つ一つの人生の節目、選択の機会に、いつも私は自分を主張したけれど、最後はお母さんの言うとおりに合わせてきた。私がまだ幼い頃は親の権威で押しつけて、私が成長して力づくでは通用しなくなると今度は一転して泣き落とし戦術を使って。

「おまえのためだよ。おまえの幸せを、願ってのことだよ」

何度、何十度、このセリフを私はお母さんの口から聞かされたことか。でも私は言葉の裏に、何か不純なものを嗅ぎつけて、反発ばかりしてきました。それが何だったのか……。十数年の年月、<sup>としつき</sup>あげくに結婚に破れて、私はこの失望、不満、失われたものはもうとりかえしがつかないのだという、どこに、誰に向けたらいいのか分からない怒り、落胆と脱力感に、ようやく名づけることができたように思えます。

お母さん、あなたは欺瞞者ごまかしやだった。私の幸福を言いながら、自分自身の生き方を私に強  
いたただけだった。私の望むことは何でもかなえてくれたけれど、あなたの価値観からはず  
れることは絶対に許されなかった。私は自由を求めて抵抗し、あがりもだえて、やがて  
くたびれはててしまい、こんなにも私のことを思ってくれるのは世界にこの人しかいない  
と内面化し、お母さんの後を歩き始めた。

でも、できなかつた。どうしても私の身体からだが、納得しなかつた。お母さん、今だから打  
ち明けますが、秀樹さんとのこと、生理的に耐えられなかつたんです。セックスが……。  
初めての時から、震えて震えて、泣いてしまった。いつも苦痛で……。

「お母さん」「秀樹さん」——実家に戻るたびに彼とお母さんが実の親子のように親しげ  
に言葉を交わしているのを見るたびに、私の胸は張り裂けそうでした。私がこのまま我慢  
していれば、この平穏な日々、家族の絆は、何事もなく続いていくんだ。それがみんなの  
幸せなのかもしれない。でも……こんな気持ちのまま子どもは産めない。子どもを産ん  
だら、今度は私がお母さんのように我が子を自分のいいなりにさせようとしてしまうだろ  
う。それが怖い……。

お母さん、車窓から大川の流れが見えます。電車は川と並行に、上流に向かって走って  
行きます。私の神経症は、どこまで遡れば良くなるのか。もつれた糸がほぐれるのか。傍



目には、何不自由ない裕福な家に見えたでしょうね。川に面する建て売りの家々の外観がそうであるように。私は、幸福ではなかった。死ぬほどの不幸ではない、かもしれない。でも幸せだと感じられない、昨日も今日も明日も生の充実感が得られない日々が続いているのは、山からころげ落ちる石を何度も何度もかつぎあげてはまた拾いに降りる、あのシジフォスの神話のように、私には耐え難いことに思えるのです。私の生命いのちの源、生の喜びは、どこから湧いてくるの？

アメリカの大学で心理学を学び直しても、何も変わらないかもしれない。カウンセラーの言う「転地療法」に終わってしまったでもいいんです。誰も私を知らない場所、聞き取りにくい言葉、異国の風土環境で、一人で暮らしてみたい。そうすれば閉ざされた私の心も、リセットするかもしれません。お母さんと距離を保てるだけでも、お互いにとって良いことでしょう。今のままでは、お母さん、私は憎しみばかりがつのって、何をしてしまうか自分でも恐ろしいのです。

お母さん、電車は鉄橋にさしかかりました。正直に言いますと、昼下がりの吊革に何人かがぶらさがっているだけのすいた車内に、お母さんが隠れていやしないか、私は先程から電車が駅に停まるたびに目を凝らしていたのでした。通院のために何度も二人で通った電車……。そんなことは、ありませんよね。本当に、私はひとりだ……。お母さん、

私はあなたを非難ばかりしてきました。でも、私は自分の生き方に自信が持てなかった。最後まで自己主張できなかった。本当は、私もお母さんの敷いたレールの上を歩きたかったのでは・・・と考えることは、私にはとても苦しいことです。この苦しみを乗り越えられて、いつか私があるを一方的に責めるのではなく、あなたを一人の人間として受けとめられるようになった時——もしかしたらあなたも別の生き方を望んでいたのにできなかったのでは？その失望が私への期待と裏返しになった羨望がないまぜになって、私の自由を縛ろうとしたのでは？と、私が心理学書の知識ではなく文字通り心の底から感じられる、共感できる日が来れば、それが私にとつての卒業の時、また日本に戻って電車を逆方向に乗っている時なのかもしれません。

その時、私の目には、今のこの景色、雲の姿、川の流れが、どのように映っているのでしょうか・・・。楽しみです。だから、泣かないでね。

寄宿舎に着いたらお電話します。

お体に気をつけて。

お父さんにもよろしくお伝え下さい。

慶子

その十二

我が輩は小猫である

我が輩は小猫である。身体は、もうない。

我が輩、生まれし時より母の面影を知らず、気づいてみれば河川敷に捨てられて、幼少より艱難辛苦をなめしが、つい先頃、思うところありて幽界へと入場し、この手記を記せり。明界における読者諸兄の今後を慮りて、ここに事の顛末を語ろうと思う。

人間とかく二人寄れば思惑が交錯する。交差するところから軋轢が生じる。軋轢なくして済まされればこんな目出度い話はないが、世の中なかなかそうは行かない。世間というものがある。自分の真情がある。信念が、あるやもしれぬ。

ここで調停者が登場する。彼の存在は、社会の要請である。古代の亀甲による占卜、天命の忖度が始まって中世は領主の下知下命、近世の大岡裁き、近代の絶対君主制を経て現代の民主的な職業裁判官である。海の向こうには、一般市民の参加する陪審員制度もありやと聞く。

我が輩の場合は町内会ならぬ回覧板であった。A氏の発案である。へ子猫を救う会・食事当番表とある。各自ご希望の日にちを○をして下さい、とワープロで書かれた紙に、一ヶ月のカレンダーが付されてある。有志各員は、ご丁寧に紐で吊されたボールペンで名前を記入するのである。本名ではない。このサークルでの通り名である。回覧板は「立入禁止」と書かれた下水処理場の掲示板の脇に吊され、雨に濡れても大丈夫なようにビニールで覆

われている。実に丁寧な仕事と言わねばならぬ。三ヶ月先の当番まで埋まっておる。このようなご身分で、我が輩が果たして野良猫と呼ばれてよいものか、識者の判断を待ちたいものだ。

とまれ、発端はA氏の善意の埒外らちがいから始まった。忘れもしない○月×日（奇しくも仏滅であった）二人の名前が同一日付に書きこまれたのである。B氏とC氏が同時に記入したとは考えにくいので（付言すれば、それまで一人一日担当というのがこの会の暗黙の了解であった）B氏がC氏の後に書き加えたものか、その逆かいずれにせよ二名連記の形になってしまったのである。第三者の悪ふざけならば、本人が気づいて二重線で抹消するであろう。それもなく我が輩は高札を見上げながら、不安な予兆に苛まれたものだ。しばらく下痢が続いた。するとXデーの数日前になって、「どっちか降りろよ」と矢印で引かれた殴り書きがあった。すぐに「お二人で半々にやられてもよろしいんじゃないでしょうか」という書き込みが続き「それではミーコも困るだろう。中華と和食を一膳で食べさせられるようなものだ」「賛成！テイストが異なる。ルールに従え」「そんなルール、誰が決めたんだ？」「話し合いの解決を望みます」「一月の当番に当たった回数を公平に割り振ったらいかがでしょう」「そんなの、ノルマでイヤ」「大の月と小の月がありますぞ」「いい加減にしてくれよ。こっちまでムカつくぜ」「いったい、管理人は何をしてるんだ？早く收拾し

る!」「あなたたち、一番困ってるのはミーコよ」「私もわたしなりに努力してます」——  
A氏が几帳面に継ぎ足し継ぎ足しして糊付けしたA4のコピー紙にびっしりと、書き込み  
が続いたのである。

我が輩は頭を抱えてしまった。B氏とC氏が何故<sup>なにゆえ</sup>そこまで意固地なのか、まずもって  
分からぬ。我が輩はどんな志もありがたく頂いているのであるが、たまには腹の具合で残  
すこともある。翌日の当番のB氏あるいはC氏がその残飯を見て胸を痛め、徐々に反感を  
募らせたのかもしれない。あるいは全く見地を変えて、一人は示し合わせて混乱を招き寄せ、  
ほくそ笑んでいるという図式も浮かばぬでもない。いわゆる愉快犯である。我が輩として  
も何とかして事態を打開したいが、十人近い会員が毎日我が輩に会いに来る（不思議なこ  
とに鉢合わせになったためしはない）。まずいそいそと掲示板をチェックしては溜息をつ  
いたり悲憤慷慨し、それから我が輩の名前を呼んで頭<sup>おつひ</sup>をなで回しながら、自身の心情をと  
うとうと語り聞かせるのである。そのどれもが、我が輩には真実に聞こえる。琴線に響く。  
我が輩が思わずもらい泣きしてしまうことも度々であった。

そうこうしているうちに、対立は抜き差しならぬところまで来た。果たして敵対してい  
るのは、どちらも降りようとしないうちB氏とC氏の間でなのか、二人を批判したD氏対B・  
C連合なのか、モラルの低下を嘆くE氏対あくまで自主性を尊重せよと説くF氏なのか、

建設的な提案をしたと自負しているのに皆から黙殺されたと怨嗟を抱くG氏の自噴なのか、いきなり切れて罵声を投げつけたH氏と金切り声を上げたI氏の個人的なもつれなのか、管理を徹底せよと主張する一派に対峙して頑なに立場を守りながらも被害者意識に苛まれ始めたA氏の間なのか、面白がっている人間対悲しんでいる人間対怒っている人間なのか、男と女なのか、そもそも猫が好きなのか嫌いなのか（「もとい、「嫌い」でやってるはずないだろう」という書き込みあり）、生命を尊ぶとはどういうことなのか、「私達の民主主義が試されている」云々、問題は限りなく発展・拡散し、ぐじゃぐじゃのバトルロワイヤル、收拾がつかなくなってしまうたのである。

そして、ついにカウントダウンの鐘が鳴ったある日、我が輩は見たくないものを見てしまったのだ。「殺」の一字、ナイフで犯したとしか思えぬ切り込み。私信を盗み見てはいけないと気が咎めていた我が輩も、さすがにこの時だけは恐怖感に襲われて全身が総毛立ったものだ。誰が誰を殺るといふのだ？ あんなにも捨て猫に優しくしてくれるボランティアの人達が、何故に？ ・ ・ ・ 一人一人の顔を思い浮かべては、我が輩は涙にくれた。げに恐ろしきは人間の欲望、深き心の闇。

それ以来、書き込みはパタツと止み、回覧板は雨に濡れた。我が輩に給仕をしてくれる会員たちは相変わらずやさしかったが、目には悲哀の色を帯び、そつと目頭を押さえるご

婦人の姿もあつた。我が輩は懊惱した。日に日に食が細くなり、そうなると頭はますます冴え渡つて、考えに考え詰めた。一体、我が輩の存在理由は何処に？畜生として生まれ落ちしその出生より善意の人々に食を与えられし僥倖、そして思わぬ運命の変転・・・我が輩一個の生が、六道高位なる人間の間に憎悪を引き寄せ、殺人事件にまで発展しかねぬとは・・・ここで我が輩が大患を思えば、敵対者は休戦し、人々の間に和解ムードが生まれるであろうか？そうとも思えるし、そうだとも思えぬ。人生の根柢は半々である。日々、生きるか死ぬか、道理は五分五分である。

そこまで思い至つた時、我が輩はハタと膝を打つた。我が輩が死のう。殺とは、殺人ではなく殺猫のことであつたのだ。天の啓示である。我が輩は喜びに打ち震えた。何という神々しい使命。我が輩のような猫畜生でも、人間どもに対して教唆できるのである。教え導くとは言わぬまでも、死をもつて改悛を迫るのである。我が輩は恍惚とした。夕餉時、人通りの途絶えた自転車道路上上つて、夕景にたたずみ、頬を赤く染めた。我が輩がこの世から消えれば一切の鬭争は終止符を打ち、個人の心的外傷は回復し、この散歩道もいつもと変わらぬ無関心な人々が行き交う平和な道に戻るのであろう。それでいいのだ。それが太平の世と言うものだ。踏み込み過ぎてはいけぬ。遠去かってもならぬ。程良い車間距離が、処世術の最たるものである。寂しくなんか、あるもんか。



残る問題は、我が輩の死体である。亡骸の始末のことではなく、いかに他殺と誤解されずに自殺として信じていただけか、その死に方である。早い話、ご先祖様のように川に飛び込んで溺死すれば事は簡単であるが、我が輩の死骸は水に流され、会員の目には触れまい。我が輩は保健所の猫殺しにあったか発情期で相棒を求めてさまよい出たかとあらぬ憶測を呼んで、更なる対立と不信を巻き起こすこと必定ひつじょうであろう。それは全く我が輩の意図するところではない。

熟慮に熟慮を重ねた末、我が輩は近くに住む青テントの住人からナイフを失敬し、割腹自殺を遂げることにした。猫に小判ならぬ、小猫にアーミーナイフ？読者よ、笑うことなかれ。猫にも気概と言うものは有るのである。問答無用、潔い死に様を見れば、いったんは血にまみれた死体から目を背けた会員諸君もすぐに愛くるしい我が輩の映像で死骸を覆ってしまい、記憶は日に日に盤石の重みとなって彼らの心象を美化し、追憶はゆるぎなきものとなるであろう。不毛な対立は終息し、サークルは自然解散となって人々は家庭ホームに戻る……。

後は、通りがかりの第三者が保健所に連絡して職員がボヤきながら我が輩を始末するのみである。努々ゆめゆめ、警察に通報などして騒ぎを大きくすることなかれ。

我が輩は静かに三途さんずの川を渡りたいのである。バサラ！願わくば、我が輩に一滴ひとしずくの末期まつびの水を賜らんことを。

75ページの短歌二首は、渡部良三『歌集 小さな抵抗』（シャローム図書 1999年）より引用させていただきました。ここに感謝の意を表させていただきます。